

学びを支える学生支援

特集
インタビュー

中尾 繁樹（教育学部教育福祉学科）学科長に聞く
「特別ではない特別支援教育」のなかに、
多様化する大学生に対応する学生支援のヒントがある。

～つながる・つなげる～

- 02 特集）KUISモデルの学生支援
- 04 KUISモデルの学生支援 1）学修支援センター
- 06 KUISモデルの学生支援 2）初年次教育
- 08 KUISモデルの学生支援 3）学生による学生サポート
- 14 一冊でつなげる）学生の学びをサポートし続ける 累計26万部のロングセラー

- 16 2018年4月に関西国際大学は創立20周年を迎えます。
- 18 自分の未来へつなげる）卒業生の今
- 22 KUIS Topics
- 27 留学生直伝！ 簡単クッキングレシピ 02 フィリピンの家庭料理「アドボ」

多様な学生をとことんサポートする

KUIS モデルの学生支援

すべての学生が自分らしく学べる教育環境づくりのために

1998年の開学から19年。開学当初から関西国際大学では「大学全入時代」の高等教育のあるべき姿を追求し続けてきた。

あらゆる学生が自分にふさわしい持ち場を発見し、社会で活躍できるように——。日本初の学習支援センターの開室や、初年次教育やGPA制度のいち早い導入、アドバイザー制、KUIS学修ベンチマークの制定など、先駆的な数多くの教学プログラムの導入に関わってきた副学長・山下泰生（グローバル教育推進機構 教授）が、関西国際大学独自の学生支援の特色を語る。

すべての専任教員に関わる
独自の学生サポート体制

本学では、1998年4月の開学と同時に、「学習支援センター（現・学修支援センター）」を日本で初めて開設しました。同時に、GPA制度を導入し、厳格な成績評価をする一方で、担当教員（アドバイザー）が学生一人ひとりを指導するアドバイザー制を導入するなど、学力向上のためにきめ細かく指導できる体制を整えました。

その後、入学後の学生が大学に早期適応できるように、他大学に先駆けて初年次教育をスタートするなど、さまざまなアプローチで先駆的な学生支援を実践しています。

そうした取り組みが評価され、文部科学省の特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）に2004年度「大学のユニバーサル化と学習支援の取組」が、2006年度には「初年次教育の総合化と学士課程教育への展開（特色GP）」が採択されました。

その後も、「KUIS学修ベンチマーク」を制定して学びの達成度を可視化するなど、独自のプログラムに取り組んでいます。

そのなかでも、一人ひとりの学生を全学的に支援する、という姿勢が表れているものとして、学修支援センターで実施している「センターオフィスアワー」があります。教員が講義の空き時間に研究室で学生の相談に乗る、というオフィスアワーはどの大学にもありますが、それとは別枠で広く学生の学習相談を受け入れる時間を週1コマ設定して

もらっているのです。

研究室は敷居が高いという学生が多いので、教員にはできるだけグループワークルームや図書館といったオープンスペースを利用していただくようお願いしています。講義の補習、レポートの指導、カウンセリングなどの個別対応のほか、キャリアに直結する資格取得対策講座などを実施していただいている場合もあります。教員にとってはご負担だと思いますが、その意義を理解して前向きに取り組んでいただいていますし、確実に学生の学力アップにつながっています。

その成果でいうと、2017年度は教員採用試験一次試験に85名が合格していますし、医療系の国家試験でも、看護師98%、保健師100%、助産師100%という合格率が結果として出ています。

保健医療学部では学生のほぼ全員が看護専門職を目指していますし、教育学部の学生も教員や保育士を希望していますので、やはり国家試験や教員採用試験に合格することが大きな目標になります。そのため、この2学部では特に学修支援センターが実施するキャリア支援のプログラムだけでなく、それぞれの試験対策に向けた学科独自の学修支援も充実しており、高い合格実績につながっていると思います。

4年間で着実に力がつく
学びの設計と実践を後押し

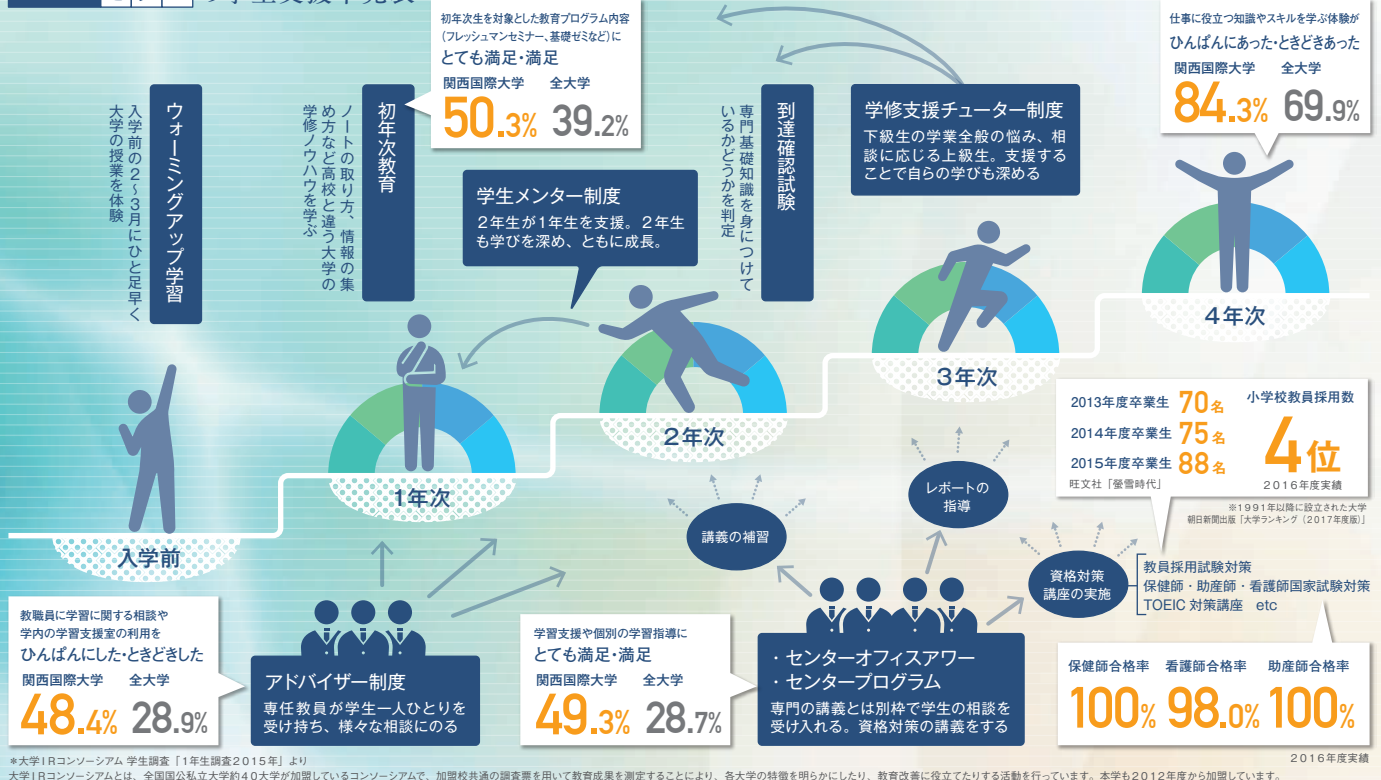
すべての学生が入学時に将来の明確な目

標を持っているわけではありませんから、そのような学生にも自分の将来をイメージさせ、それに向かって努力していくように仕向けることも大学の大きな役割のひとつであると考えています。学期ごとに学びの達成度を振り返る「リフレクション・デイ」を設け、そのために、それまでの成績や活動を蓄積し、一覧できる「eポートフォリオ」を導入しているほか、2013年には「到達確認試験」も始めました。この試験は、学生一人ひとりが専門基礎知識を身につけているかどうかを判定するための学力試験で、2年生の終わりに実施しています。これに合格できなければ4年生の卒業研究の履修登録ができない仕組みになっており、不合格者には合格するまで追試を課しています。

学科ごとに専門基礎知識を問う問題をあらかじめ100題程度用意して、それを学生に示した上でそこから抜粋して出題する方式ですから、出題範囲が明確で、しっかり勉強すれば合格できます。こうした関門を作ることで基礎学力の定着を図っています。

本学の全学生が、学部・学科を問わず4年間で身につけてもらいたい能力を「KUIS学修ベンチマーク」として、2006年に制定しています。到達目標を項目として設定し、各学期末にそれまでを振り返って到達度をチェックし、次の目標を立ててもらっています。また、そうした能力を社会で生かすために、自分の適性に合った目標設定をうながすサポートも行っています。

たとえば、2016年に新しく始めた「ラ



※大学1Rコンソーシアム 学生調査「1年生調査2015年」より
大学1Rコンソーシアムとは、全国国私立大学約40大学が加盟しているコンソーシアムで、加盟校共通の調査票を用いて教育成果を測定することにより、各大学の特徴を明らかにしたり、教育改善に役立てたりする活動を行っています。本学も2012年度から加盟しています。

「ワーニングアップ学習」はそんな取り組みのひとつです。学生自身に卒業後の自分のキャリアをイメージさせ、そのための4年間の学びの道筋を考えさせるのです。たとえば、漠然とでもグローバル企業で働きたいという希望があるなら、「2年生の夏にはグローバルスタディで海外に行き、そのために2年の春学期までにこの資格を取り、1年生の秋学期までにこの授業を履修する……」といった具合に、夢から逆算して学習計画をマッピングし、定期的にその進捗をチェックして学修を進めていきます。教職員はその計画立案の助言をしつつ、実現に向けて全力でサポートします。たとえ初期段階で不完全でも、先を見越して計画を立てることに意義があると考えています。

学生一人ひとりが抱える 多様化したニーズに 誠実に対応

少子化により高等教育のユニバーサル化が進み、学習習慣、学習意欲、学力などさまざまな面で学生の多様化が進んでいます。高校までに学習習慣が身につけている学生もいれば、そうでない学生もいます。学力だけでなくメンタル面のフォローを必要とする学生も少なからずいるので、学修支援センターが窓口になり、担当教員や保健室・学生相談室とも連携をとってきめ細かく対応しています。入学前から「大学生活になじめるか」「勉強についていけるか」とい

う不安を持つ学生も多いので、入学前の「ウォーミングアップ学習」にも力を入れており、早めに学生一人ひとりの状況を把握するようにしています。

このウォーミングアップ学習の段階で、不安を持つ学生には個別に相談に応じますし、必要に応じて保護者からの相談にも応じています。また、大学公認の強化クラブ（硬式野球部、サッカー部、硬式テニス部）に入部予定の生徒には、さらに「プレウォーミングアップ学習」として、部活動と学業を両立する方法を伝えています。大学としては、多様化するすべての学生をフォローし、水準以上の能力を身につけて社会に送り出す責任があると考えています。

支援が必要な学生への個別対応を重ねながら、常に新しい試みを実践してきました。学生対応のプログラムメニューが少ないと、多様化するすべての学生に対応できないので、色々な手段を講じようという方針なのですが、今後はさまざまな取り組みの整理統合も進めて、いかにわかりやすい仕組みにするかが課題です。ただ、やはりこうした丁寧な支援の甲斐あって、入学してからめざましく力を伸ばす学生もいることも事実です。

本学ではオープンキャンパスを学生が運営しており、来場者の案内などもすべて学生が担当するのですが、多くの受験生や保護者が、彼ら・彼女らの明るくフレンドリーな対応を見て大学に好印象を持ってくださいますし、学生の成長に将来の自分の姿、わが子の姿を重ねてくださいませ。

世界で活躍する学生を育てる 新プログラムも始動

学生支援の新しい試みとしては、今年度から「オナズプログラム」が始まりました。特待生のような制度で、将来、世界で活躍できる資質を持った学生に対して、特別な教育プログラムでキャリア形成をめざしてもらおうというものです。オナズの指導教員により、本人の希望を確認して関連する全学科の科目が履修できるのが特徴で、目標に応じて自分だけの学びを組み立てられます。今年度は2人がこのプログラムの対象学生として入学しました。

高い目標を掲げ、高いモチベーションを持って学ぶ姿が周囲の学生の向学心も高めていると思います。上位学年の科目も履修できるので学年を超えて周囲の学生にプラスの影響を与えているようです。

また、本学の何よりも大きな力は、専任教員の先生方の熱意だと思います。担当授業以外に「センターオフィスアワー」や「センタープログラム」に全専任教員が関わっているというのは他大学にはあまり例がないと思いますし、授業の質を高めるためのFD研修会（今年度よりPD）の出席率が90%以上と、他大学に比べて突出して高い状況にあります。

研究者である以上に教育者としての学生の育成に情熱を傾けている教員の存在があるからこそ、この厚い学生支援体制が実現していると思います。

他部門と連携して、 学びの環境とソフトを提供 学生が必要とする支援を提供するために

学生の「学びたい」
意欲に応える
さまざまな学修プログラム

学修支援センターは、学修支援室、メディアライブラリー（図書館）、メディアサポート室という3つの施設から成り立っています。

学修支援室は学びの総合相談窓口として、「履修登録について相談したい」「学習計画の立て方について教えてほしい」「資格や検定試験について知りたい」など、在学中に抱える学習面での不安や疑問について相談に応じています。メディアライブラリー（図書館）は、調べ物や自習にとどまらず、グループワークにも対応できる小部屋を備え、ラーニング型の図書館となっています。メディアサポート室は、学内ネットワーク環境の管理・保守を担うとともに、コンピュータ機器を利用した授業のサポートを行っています。

学修支援センターでは、学生からの多種多様なニーズに応じるため、教員と連携した学修支援の取り組みを行っています。その代表的なものが、「センターオフィスアワー」と「センタープログラム」です。「センターオフィスアワー」は、本学の専任教員が交代で週1コマ、学修支援室やメディアライブラリー等に常駐し、学生からの相談や質問に答える場です。授業に関する質問、課題の相談、将来の進路について相談をしてもよし。学部学科の垣根を越えて気軽に教員にアクセスできる貴重な場です。

「センタープログラム」は、センターオフィスアワーを利用した無料の講座で、高校まで

学修支援センター長
清水美知子 Michiko Shimizu
プロフィール
人間科学部教授。津田塾大学国際関係学科卒業、甲南大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位取得。博士（社会学）。専門は家族社会学・家庭文化史。主著に『（女中）イメージの家庭文化史』（第30回今和治郎賞、世界思想社、2004年）など。

学修支援センターの6つのサポート



学習相談

「履歴登録が不安…」「授業についていけない」「資格を取りたい!」「頑張る気持ちはあるけれど、何からやればいいかわからない…」など、学修に関するさまざまな疑問、質問、相談を学修支援室で受けることができます。



センターオフィスアワー

専任教員が、学修支援室やメディアライブラリー（図書館）などに決まった時間に待機して、学生からの相談に個別に対応します。図書館でのオフィスアワーでは、文献にアクセスしながら個別指導を受けられます。



センタープログラム

授業とは別に、学力アップ、資格取得、キャリア形成などにつながる無料講座を多数開催。授業の空き時間を利用してスキルアップを図ることができます。

〔開講プログラム例〕

■基礎英語、基礎数学 ■公務員試験対策講座 ■教員試験対策講座 ■TOEIC対策講座
■ノートのまとめ方講座 ■警察官試験対策講座 ■漢字検定に挑戦しよう! ■簿記検定2級、3級対策講座など



学修支援チューター

養成プログラムを受講した学生が、「学修支援チューター」として、新入生をはじめ下級生に授業以外の時間に個別指導・支援を行います。教員に質問しにくいことでも、気軽に相談できます。



自習教材&学習スペースの提供

各種検定対策、各種採用試験対策、語学教材などを揃えて、積極的に活用できるようになっています。グループワークルームも利用できます。



ステップアップ・プログラム

資格対策や教員採用試験や就職試験対策などの講座を、専門の講師が行う学内Wスクールです。

〔開講プログラム例〕

■秘書検定2級対策講座
■教員採用試験対策講座



の学習範囲を学び直す講座から、正規の授業の補習を行う講座、教員・看護師・公務員・大学院等の試験対策講座まで、バラエティに富んだプログラムが用意されています。

学修支援センターでは、「学修支援チューター」という、学生が学生を支援する主体的な学びのシステムにも力を入れています。学修支援室には、養成プログラムを修了した2～4年生が配置され、学生からの相談に応じています。

多様化が進む学生のすべてを全学が連携して卒業までをサポート

支援が必要な学生を見定め、適切な対応につなぐことも学修支援センターの大きな役割です。

たとえば、入学予定者を対象としたウォーミングアップ学習において、「基礎学力診断テスト」を行い、「KUISドリル」（入学生必修のeラーニング教材）の実施率等も加えて分析し、結果を学生および担当教員（アドバイザー）にフィードバックしています。この取り組みにより、基礎学力に不安のある学生を早期に発見することが可能となりました。

また、全学年の全科目を対象に「欠席調査」も行っています。5週目の授業を終えた時点での欠席回数を調査し、週1回科目で2回以上欠席した科目については担当教員（アドバイザー）に連絡し、学生との面談を要請、報告書を提出してもらいます。該当科目が3科目以上ある場合には、保護者にも書面で連絡します。欠席や成績不振の理由

には、単に学習習慣が身についていないだけのこともあれば、背景にメンタルの不調や病気が関係する場合もあります。補習で対応すべきか、保健室や学生相談室と連携すべきか、個々の学生についてその都度判断しながら適切なところにつなぐ必要があります。

学生の学力にも幅がありますし、どこに照準を合わせるかは難しいところです。しかし、入学した以上は本学の学生ですから、全員をできるだけ卒業までサポートするのが大学としての使命です。そのためには、問題を抱えた学生がいれば手を差し伸べ、解決・改善に導く体制を整えておかねばなりません。「大学生になってそこまでののか（過保護だ）」という声もあるでしょうが、こうしたきめ細かな支援ができるのも、小規模大学の利点と考えています。



その甲斐あって、入学後に大きく伸びる学生は少なくありませんし、入学時に抱えていた問題を4年間で克服して、社会で活躍する卒業生はたくさんいます。一人ひとりに自信を持てるきっかけを、いかにタイミングよく提供できるかが、学修支援の重要なポイントです。

アドバイザーだけに責任が集中しない組織的な体制づくりが今後の課題

今後の課題は、担当教員（アドバイザー）に責任が集中しない体制づくりです。本学のアドバイザー制は学生支援の観点からも素晴らしい成果を挙げていますが、一方で、学生の多様化が進むなか、対応が追いつかなくなっている現実もあります。教員の熱意で差がつくことのないよう、すべての学生に学修支援の機会を与えられる体制づくりが必要です。そのひとつの解決策として、学内に散在する情報を統合した「学生カルテ」の学修支援への導入を検討しています。

また、センタープログラムに比べると、待機型のセンターオフィスアワーは十分に活用されておらず、これを活性化することも大きな課題です。学修支援室に寄せられた学生からのニーズをもとに、センターオフィスアワーで対応できる内容をより明確に学生に提示するなど、活性化に向けて積極的に手を打っていきたいと考えています。

こうした学修支援の取り組みの結果、卒業生や保護者の本学への満足度は総じて高く、「面倒見のよい大学」という社会における評価も定着しています。しかしその反面、支援を必要とする学生が増える傾向もあります。誰が、いつ、何を、どこまで、どのように支援するのか。より適した対応ができるよう、学修支援センターでは検討を重ねていきたいと考えています。

受動的な学びから、 主体的な学びへ。

スムーズに大学に適応させる導入教育

初年次教育のパイオニアとして
進化を続けた
充実のカリキュラム

新入生がスムーズに大学生生活のスタートを切れるようサポートする教育プログラムが「初年次教育」です。現在ではどの大学でも当たり前のように入導されていますが、本学が開学した1998年度当時は、まだほとんど普及していませんでした。そんな中、「学習技術」の前身となる単発講座をスタートさせるなど、初年次教育への取り組みをいち早く開始し、その後19年間、その内容を進化させながら拡充してきました。

そして現在では、入学前の「ウォーミングアップ学習」、4月の「フレッシュマンウィーク」、1年生の必修科目となっている「学習技術」「初年次セミナー」「リサーチ入門」といったプログラムや科目を組み合わせ、大学で学ぶためのスキルを総合的に身につけられるKUISモデルの初年次教育を行っています。これらの内容は、各学科の代表教員で組織される「初年次教育委員会」で検討しています。

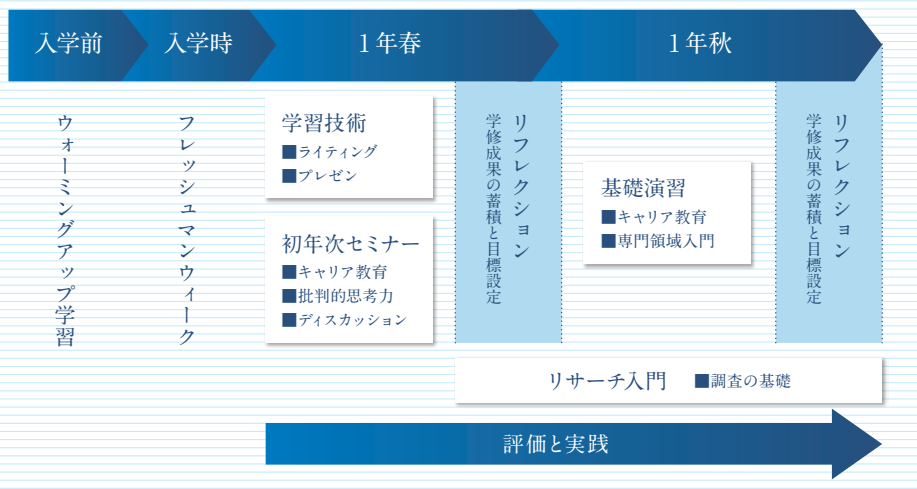
初年次教育部門長

田中亜裕子 Ayuko Tanaka

プロフィール

1996年、甲南女子大学大学院文学研究科文学研究科修士課程修了、修士（心理学）。2000年、同後期課程心理学専攻修士課程単位取得後、兵庫県スクールカウンセラー、三木市スクールカウンセラー、三木市健康福祉課発達相談員などを経て、2007年、関西国際大学人間科学部人間心理学講師となる。現在はグローバル教育推進機構講師。臨床心理士、精神保健福祉士。

初年次教育の流れ



基本的な学習技術に加えて ディスカッションの力をつける

まず、入学前後のウォーミングアップ学習やフレッシュマンウィークでは、コミュニケーションワークを通じた仲間づくりをサポートするほか、大学や学部・学科に関わる情報提供などを中心に行います。その主な狙いは、大学生活へのスムーズな適応です。

1年春学期に行う「学習技術」や「初年次セミナー」などの必修科目では、ノートの取り方、レポートの書き方といった一般的な学習スキルの修得のほか、グループワークやディスカッションにも力を入れています。本学ではほとんどの科目に「アクティブラーニング」を取り入れています。それはチームで問題解決に導くスキルが欠かせないからです。同時に、本学独自のカリキュラムや学生支援制度に関わる情報提供も行い、学生が自分自身の成長のために、大学の教育資源を使いこなすためのヒントも提供しています。

昨年度からは「評価と実践」という新科目も加わりました。それぞれの適性や進路希望に合わせて学習計画を立てたり、「**KUIS学修ベンチマーク**」を活用して自分自身のパフォーマンスを客観的に評価するなど、キャリア形成を後押しするユニークな科目です。

これらの初年次教育で重要な役割を果たしているのが「学生メンター」です。学生メンターとは、1年生をサポートする上級生のことで、毎春、初年次教育委員会が窓口となって志望者を募集しています。そして、応募学生の中で研修を終えた学生メンターは、フ

レッシュマンウィークのプログラムや初年次セミナーに参加して、教員とともに新入生をサポートしていきます。新入生は上級生を通じて自分の成長を思い描くことができますし、上級生にもリーダーシップが身につきます。互いの成長の機会になっているのです。

初年次につまずく学生を フォローするための次なる対策

こうした初年度教育を通じて、ほとんどの学生が、より高度な専門教育へとスムーズに移行していきます。しかしその一方で、初年次教育でつまずいてしまう学生もいます。そのまま不適応を起こしてしまうと中退などにつながることもあるので、できるだけ早く適切な対応をとる必要があります。そこで、成績不振や欠席が続く学生は「要支援」として個別対応を行っています。



授業の欠席率が高い学生には生活リズムやメンタル面についてのカウンセリングを行うこともありますし、学修支援センターに情報をつないで、**アドバイザー教員**を初めとする学科の教員から学生にアプローチしてもらうこともあります。

初年次教育が充実しており、成績などのデータをきめ細かく蓄積しているからこそ早

Keywords

■ウォーミングアップ学習

入学前に実施する事前学習。ひと足早く大学の雰囲気を感じてもらい、大学での学びの進め方や、制度、仕組みなどをオリエンテーション。学生同士のコミュニケーションワークなども取り入れ、早く大学になじめるよう、人間関係づくりもサポートする。

■フレッシュマンウィーク

4月第1週の1週間を使って、学長の講話や学科ガイダンスなどを開催。上級生の「学生メンター」も参加して、1年生同士の交流をサポートする。

■学習技術

ノートの取り方、文章の書き方、図書館の使い方、レポートの書き方など、基本的なアカデミック・スキルを総合的に学ぶ科目。現在、多くの大学で初年次教育のテキストとして使用されている「知へのステップ」は、関西国際大学のオリジナル教材から生まれたもの。

■初年次セミナー

アドバイザー教員が担当する15～20人程度のゼミ形式の科目。関西国際大学での学びに必要なスキルをディスカッション形式のグループワークを通じて学ぶ。学生メンターも参加して新入生をサポートする。

■リサーチ入門

フィールドリサーチの手法を取り入れた「グローバルスタディ」などの科目を履修して、しっかり学ぶことができるよう、アンケート調査やインタビューなどの方法を学ぶ。

■アクティブラーニング

グループディスカッションや社外ワークなどを通して学生が能動的に学ぶ手法。「一方通行で講義を聞く」という受け身の大学教育の質的転換を図るために取り入れられた。

■KUIS学修ベンチマーク

学生が身につけるべき能力を示したものの。5つの大きな目標とそれを達成するために必要な能力で構成されており、これらのチェックを通じて成長を確認しながら前進できるようになっている。

[5つの大項目]

- ・自立できる人間になる
- ・社会に貢献できる人間になる
- ・心豊かな世界市民になる
- ・問題解決能力を身につける
- ・コミュニケーション能力を身につける

■アドバイザー教員・アドバイザー制度

「アドバイザー」と呼ばれる専任教員が学生一人ひとりを受け持ち、相談に応じる。高校から大学という環境が大きく変わることに対する適応への不安についての相談や履修指導、学修目標や進路に関する相談、学業不振への対策法などについて、きめ細かな指導や相談を行っている。

期に必要な対応が打てます。こうした個別対応で学生が抱えている問題が解決し、モチベーションを回復できるケースは多いのですが、問題は学生の多様化が進み、さまざまな形で配慮が必要な学生が増えていることです。本学は**アドバイザー制度**が充実しているため、一人ひとりの学生にケアが行き届きやすく、これまでそれほど問題が顕在化していませんでしたが、さらに学生の多様化が進めば、アドバイザー教員だけでは負担が抱えきれなくなってしまうことも考えられます。そのために、組織的な対応強化が求められ、初年度教育の立場からも、新たな学生支援のあり方を学修支援センターとともに検討しているところです。

学修支援チューター&学生メンターを紹介します！

「学生メンター」とは新入生のサポートを行う2年生のこと。新入生への適切な支援を行うための研修を受け、本大学の特性と強み、集団の理解、リーダーシップ論などの知識を身につけた2年生が、新入生の初年次教育（ゼミ）を支援し、高校生活とは違う大学へのスムーズな移行をサポートします。「学修支援チューター」は、養成プログラムを受講した学生が、新入生をはじめ下級生に、授業以外の時間に個別指導を行います。レポートの作成や履修登録など、学修に関するさまざまな相談に対応します。

学修支援チューター 編

- Q1. 学修支援チューターになろうと思った理由やきっかけは？
- Q2. 学生からの相談を受けるときに心がけていることは？
- Q3. 学修支援チューターを経験して成長したこと、学んだことは？
- Q4. 学修支援チューターを経験して苦労した点、難しかったことは？
- Q5. メッセージ

Q1. 2年生の時から学修支援チューターとして活動しています。当時アドバイザーの先生にお声掛けいただいたことがきっかけでした。昔から、友人に勉強を教えたり、相談ののったりする機会が多かったこと、また、私が手伝うことで相手の理解が深まったり、問題が解決したりする瞬間が好きだったこともあり、学修支援チューターに興味を持ちました。私自身、1年生の時はたくさんレポート作成に苦戦したので、誰かに相談したり、助けてもらえたりしたら……と思っていたことも理由の一つです。私と同じような思いの新入生、後輩の手助けができればと思い、学修支援チューターになろうと決めました。

Q2. 明るく対応することです。私の周囲の人たちに「支援室ってどんなイメージ？」と聞くと、「なんとなく入りづらい」「真面目な人が行くところ」という意見がよく返ってきます。カタイ印象を和らげ、はじめての来室者が「また来てみようかな」と思ってくれるよう、笑顔で、明るく、優しい対応を心がけています。また、来室したのに何も参考

にならなかったということがないよう、全力で問題の解決にあたっています。

Q3. 来室者の相談にのるたび、問題発見力と解決力が身についていると感じています。主にレポートの作成の手助けをさせていただくことが多いのですが、「なぜ行き詰っているのか」という原因は様々です。「問われている問題の解釈がズレている」という場合もあれば、「材料がないのに、結論を書くこととしている」という場合もあり、反対に「情報を収集しすぎて、まとめることができない」という場合もあります。適切な対応をするためには、まず問題の原因を探り、それによって対応を選択することが大切であると学びました。

Q4. 私は一度物事を考えだすと納得する結論がでるまで徹底的に考えようとしてしまうタイプなので、来室者自身がやるべき課題に、私自身が本気になりすぎてしまうことがあります。それを自制することがなかなか難しいと思っています。学修支援チューターはあくまでも「サポート」だと思っているので、本来は来室者が一人でも課題に困らないよう、徐々に成長していつもらいたいと考えています。お紹介になりすぎないよう、気を付けたいです。

Q5. 「テスト勉強ってどうやるのが効果的？」「レポート書いたけど、こんな感じで大丈夫？」「就活に向けて、資格取ってみようかな？」など、どんなことでも相談にのります。必ず力になりますので、困ったときは支援室の扉を叩いてください。レポートをサクサク書き進めるためのコツや、考え方のポイント、一人ひとりにあった勉強法など、私たち学修支援チューターの経験に基づくノウハウをどんどん吸収してってください！

熊本 ゆい
Yui Kumamoto

人間科学部 人間心理学
犯罪心理学コース3年
(下関市立下関商業高等学校出身)

Q1. 私は小学校教諭になることを目指しています。学修支援チューターは、勉強の仕方を一緒に考えるなど、私の将来に役立つ経験になるのではないかと考え、やってみようと思いました。

Q2. 教えたり、指示したりするのではなく、相談者と「共に考える」という姿勢を心がけています。また、受容と共感を大切に、まず相談者の考えや意見を聞くという姿勢が大切だと思います。

Q3. 学修支援チューターをみんなに知ってもらうために、広告やアンケート等を作ることが多いのですが、そのおかげでパソコンでの作業をスムーズに行うことができるようになりました。

Q4. 難しかったのは、自分でも想像してい

ないような相談内容だった場合、どう対応したらよいかということです。

Q5. どんな相談内容でもいいので、どんどん利用してください！

平野 智一
Tomokazu Hirano

教育学部 教育福祉学科
こども学専攻 教育専修コース4年
(兵庫県立赤穂高等学校出身)

Q1. 学修支援室の方から「こういう制度が始まるんだけど、どう？」と声をかけられ、面白そうだなと思いました。わからないことを友達同士で教え合うことはよくありましたが、一度経験した先輩としてなら、もっと上手く相談に乗れるんじゃないかな、と。「こういう捉え方をして、こんな勉強をする効果的かも」という改善案を考えると好きなので、提案して試してみたいという気持ちもありました。

Q2. 「相手が自分で解決できるようになる」ためのアドバイスをしようという気持ちです。看護師、保健師としての将来を意識して、患者さんの自立支援が上手くできるようになりたいという気持ちもあります。たとえば、課題やレポートなどは解き方や考え方が伝わったかを確認したり、普段の勉強や総括試験対策など他に何か困っていないかを聞いてみて「今後どういうことに困りそうか、次はどうするか」を一緒に考えたりしています。

Q3. 相手の反応を見て、自分の話をどの程度理解してくれているかを感じて、対応を変えるということが何となくできるようになりました。コミュニケーションの基本かもしれませんが、私は苦手だったので…。また、他人が理解しやすいよう噛み砕いて説明していく中で、自分自身がわかっていなかったり整理できていなかったことの多さに気づけました。アドバイスを側の視点に立っていると、要点というのか、試験で出

したくなるポイントも読み取りやすくなってきた気がします。

Q4. 「先生の話を聞きながらノートを取ることが苦手」「勉強時間が取れない生活環境」「友達や先生に質問しにくい」というような、解決しにくいことで困っている人へのアドバイスには悩みました。学生相談室に案内することもありましたが、相談に来てくれていることがありがたいので、親身になって一緒に考えて、前向きに取り組めるきっかけを作れるようにしています。

Q5. それぞれの学部学科に学修支援チューターがいて、学修支援室内に専任の職員もいますので、幅広い相談に乗ることができそうです。何より、とても気楽に話ができる雰囲気です。知らない人相手では不安なら、友達と来てみてはいかがですか。予約はいらないので少しの時間であっても、ぜひ気軽にのぞいてみてください！

金成 忠幸
Tadayuki Kanenari

保健医療学部 看護学科4年
(私立滝川高等学校出身)

Q1. 先生から「ピアノを指導するチューターになってみたいか？」と推薦していただいたのがきっかけでした。わからないことや悩みを聞いてあげられるような存在になりたいと思い学修支援チューターになろうと思いました。

Q2. 誰もが悩みを持って訪れるので、まずは安心して悩みを打ち明けてもらえるように笑顔で対応しています。私自身の経験などから知識を引っ張り出して、一番いい解決方法を探していきます。コミュニケーションをたくさんとることも意識しています。たくさん話すことで緊張も和らいで自然と悩みを言いやすくなり、また利用してくれと考えるようになります。ピアノを指導する場合は、よりよく練習できるような環境づくりを心がけています。

Q3. カウンセリング能力が向上したのではと感じています。相談に来た人が何に困っているかを解決してあげるのがベストなのを考え、それを一緒に解決していけるように関わっています。自分の経験を活かしながら、その人に合った解決方法を見つけて支える。そこに学修支援チューターとしてのやりがいを感じています。一人ひとりにていねいに関わることでカウンセリングの力は徐々に身につけていると思います。また、私はパソコン作業が苦手だったので、チラシ作りなどを通してパソコン（Word など）を使えるようになったのも成長したことに含まれると思います。

Q4. 学修支援チューター制度を利用する人がまだ少ないので、利用者をいかに増やしていくかを考えていくことが難しかったです。以前は学修支援室の奥にブースを設けていた

ので、1年生などは入りづらかったのではないかと思います。チューターよりもメンターに相談しに行く学生さんも多いので、「チューターだからこそできること」を宣伝したいと考えています。質問をしやすいようにピアノの練習中も見回りを行い、わからないところをすぐ聞けるような環境づくりを心がけようと思っています。

Q5. 学修支援チューターはみなさんの悩みを解決するため、より良い大学生活を送るサポートをするために存在します。悩んでいてもどう解決していいかわからない、どこに相談したらいいかわからないという方は、ぜひ学修支援室に足を運んでみてください。レポートの書き方、履修登録の仕方、グローバルスタディの相談、教員採用試験やインターンシップについての相談など、何でも受け付けています。また、ピアノと一緒に練習しながら悩みを解決します。ぜひ足を運んでみてください！

菊谷 妃菜子
Hinako Kikutani

教育学部 教育福祉学科
こども学専攻 教育専修コース3年
(大阪府立大冠高等学校出身)

学生メンター 編

- Q1. 学生メンターの活動とは？
Q2. 学生メンターになろうと思った理由やきっかけは？
Q3. 学生メンターを経験して成長したこと、学んだことは？

- Q4. 学生メンターを経験して苦労した点、難しかったことは？
Q5. 将来どんなことに生かしていきたいですか？
Q6. その他

Q1. 初年次セミナーの授業内で1年生のサポートをします。また、アドバイザーである先生方やメンター同士で前回の授業よりも良くなるように話し合いを通して振り返りを行っています。その他にも1年生の相談への対応をしています。

Q2. めったに経験できるのではなく自分のスキルアップにつながると考えたからです。また私自身がお世話になったメンターの先輩のように、1年生に大学生活の楽しさを伝えたかったからです。

池内 亮哉
Ryoya Ikeuchi

人間科学部 人間心理学科
犯罪心理学コース2年
(香川県立高松西高等学校出身)



Q3. 学生メンターの経験から、周囲にしっかりと気が配れるようになりました。学生メンターを始める前は自身のことで必死なところがあり、周囲に目を向けることをあまりしようにしてきませんでした。しかし学生メンターをはじめて1年生に気を配り、一人ひとりについて考えることで学生メンターとしての仕事以外でも自然と周囲への気配りができるようになりました。

Q4. グループワークのサポートでは、介入しすぎることが難しかったです。また、1年生の見本であるように意識して生活することは、今までにない緊張感がありました。

Q5. 将来はまだ明確に定まっていけないので、具体的にどう生かしているかはわかりません。しかし、大変貴重な経験になったので、将来この経験をできるだけ多くのことに生かしていきたいです。

Q6. 学生メンターをやって苦労したこと多くあったのですが、自身の成長のための貴重な経験であり、そのきっかけくれた様々な人たちに感謝の思いでいっぱいです。まだやり残したことがあるのですが、それも含めていい経験だったと思います。今の1年生がメンターをやりたいと思うようなきっかけを与えられていたら本当にメンターをやった甲斐があると思います。

Q1. 1年生全体のサポートや初年次セミナーの授業補助。

Q2. 私が1年生だったとき、たくさん助けて頂いた頼りになる先輩メンターを見て、自分もこんな風になりたいと思ったからです。そして、人見知りや前に出て話すことが苦手だった自分を少しでも変えたくて一歩踏み出してみようと思ったからです。

Q3. “周りを見て行動すること”と“人前で話すこと”については成長できたと思います。学んだことは、規定時間内の時間配分、人への伝え方は1つではないということ、チームプレイの大切さです。

Q4. 右も左もわからない1年生に、すべてにおいて1から教えることにとても苦労しました。自分では理解していても、それを相手に伝えたり、教えたりすることの難しさを痛感しました。1年生が理解できるようわかりやすく伝えることは、ただ単にこちらの情報を与えるだけではだめだとわかり、それを意識しながら伝えるようにしました。

Q5. 仕事に就いて後輩ができたとき、ただ伝えたり教えたりするのはなく、その人にとってわかりやすい確に教えてあげられたらいいと思います。また、仕事場は常にチームワークで働いていると思うので、そのチームに積極的に関わることによりいい仕事場にしていけたらいいと思います。

Q6. メンターを経験して、苦労することも多かったと思います。でも日を追うごとに1年生に頼られることも増え、とても嬉しく充実した日々を送ることができました。1年生が少しでも成長してくれたらなと思うながら手助けしてきましたが、自分自身の成長も感じられ、学生メンターになってよかったと思っています。



犬塚 未優
Miyu Inuzuka

人間科学部 経営学科
ホテル・ブライダルコース2年
(大阪府立山本高等学校出身)

Q1. 1年生の初年次セミナーの授業で、資料配布やメンターとして自分の考えを発表するなどの授業サポートをしているほか、1年生からの相談にも対応しています。

Q2. リーダーシップ能力の向上のためと、昨年度のメンターの方の姿をみて、「自分もあんなメンターになってサポートしてあげたい」と思ったからです。

Q3. 人前に立つことに慣れ、自分に自信を持つことができるようになりました。自分と違う考えを持っている後輩たちに出会うことで、視野も広がり、様々な考え方が理解できるようになりました。

Q4. 苦労した点や難しかったことはなかったです。「1年生のため」と考えて行動したので全く苦痛だと感じる事がなかったです。

Q5. 将来はサッカー指導者になりたいと思っているので、学生メンターとして学んだりリーダーシップ能力と人前に出ても自分の意志をしっかりと伝えられる能力を、将来指導する

中学生・高校生の前で活かしていきたいと考えています。

Q6. 学生メンターをやって、色々な自信をつけることができました。

越智 晃平
Kouhei Ochi

人間科学部 人間心理学科
スポーツ心理学コース2年
(私立神戸弘陵学園高等学校出身)



Q1. 1年生の大学生活のスタートをサポートします。新しい環境になるべく早く慣れるように不安なことを軽減してあげたり、自分でできる力をつけてもらうために声掛けをしたり、自分が見本となるように取り組んでいます。



久保 京加
Kyoka Kubo

教育学部 教育福祉学科
こども学専攻
教育・保育コース2年
(兵庫県立明石西高校出身)

Q2. 他学年と関わることで、どのようなところに疑問点を持つのか、どのような考えを持っているのかなど、自分自身の考え方、視野を広げたかったから。

Q3. 春学期の短い期間ではあったが、責任感により身についたと思います。また、色々な人と関わることで、自分が考えてもいなかった思いに気づいたり、新しいことを発見したり、新たな考え方をしてみようという気持ちを持つことができました。

Q4. 1年生のモチベーションを上げることが難しかったです。無理やりやれと言ってしまうと自ら行う力を身につけることができなないので、言葉で誘導して、やる気を出させることに苦労しました。

Q5. 就職して会社の後輩ができた時に、仕事を教えてあげたり、後輩のわからないことをしっかりと伝えることや、自分が見本となって示さなければならないときに生かしたいです。

Q1. フレッシュマンウィーク、初年次セミナーの授業補助や1年生の学校生活のサポート。

Q2. 私が1年生の時にメンターのみなさんにお世話になり、自分もそうしたいと思ったから。

中西 陸
Riku Nakanishi

教育学部 教育福祉学科
こども学専攻
教育専修コース2年
(兵庫県立三木高等学校出身)



からです。また、大学で講義を聞くだけでは経験できないことが経験できると思いました。

Q3. 「人に伝えたいことをうまく伝えること」「初対面の人とコミュニケーションをとること」の難しさ、「頼られる立場のしんどさ」「入学したての初心の大切さ」を学びました。メンターの仲間と協力して、フレッシュマンウィークを無事に終えたときの達成感最高のものでした。メンターの活動を通じて、1年生の知り合いができ、2年生の新たな友達ができ、元メンターの3年生に再びいろいろ教えてもらい、多くの先生方と話をしました。とてもたくさんの人と関わることができました。この経験は私にとってかけがえのない経験になりました。

Q4. 伝えたい事をまとめたうえで伝えることや、初めて会った人と打ち解けることです。

Q5. 新しく出会った人とでも早く打ち解け、良い関係を築くことに生かしていきたいです。また、物事を伝えるということについては、教師という職業をめざす上で重要ではないかと思っています。

Q1. 初年次セミナーで、1年生が困っていたらアドバイスしたり、それ以外のことで相談ののりたりしています。初年次セミナーの中では、プリント配布やグループ決め、グループ活動の支援をしました。

Q2. いつも人の前に立って活動することが多いので、一歩引いた目線で周りを見たいと思ったからです。そして、1年生と一緒に自分も成長したいと思いました。

Q3. 自分の考えを相手にうまく伝えたり、指示したりすることができるようになりました。すべて手伝ったり、指示したりするのはなく、相手にプラスになるような指示の出し方いろいろのをしなれないかなと思いました。また、「言ったつもり」「やったつもり」でも相手に伝わっていないければ、できた内に入らないということもわかりました。

Q4. 自分の考えを相手に伝えること、また、自分でやったほうが早いことでも、指示して相手にやらしてもらおうことの難しさ、このあたりに最も苦労しました。Q3でも書いたように、「言ったつもり」「やったつもり」ではだめで、しっかりと思いを伝えつつみんなに考えてもらう。難しかったですが少しずつできるようになったと思います。「メンターだから、初年次セミナーのときだ



木田 夢都
Yumeto Kida

人間科学部 人間心理学科
犯罪心理コース2年
(長崎県立佐世保西高等学校出身)

け」ではなく、学生生活の中でも会ったら挨拶してくれたり、見られていたりするので、とても身が引き締まります。

Q5. 将来の夢は法務教官になること。子どもを指導する立場になるので、指示の出し方や、伝え方はとても役に立つと思います。また、自分が前に立つのではなく、後方からサポートしながら、みんなが積極的に行動できるように呼びかけをするということも、すぐ役に立つと思います。

「特別ではない特別支援教育」 多様化する大学生に対応する 学生支援のヒントがある。

本学教育学部教育福祉学科の中尾繁樹教授。

豊富な現場経験を活かした講義で学生を導き、

特別支援教育の専門家として全国の小・中・高等学校を飛び回る。

各地で行われる講演会には、定員を上回る参加者が集まり

ときに、世界で活躍するアスリートの指導も行い、さまざまな相談にもものる。

「その辺のアイドル以上の過密スケジュールをこなしているんですよ」と笑いながら、

予定がびっしりと書き込まれた手帳を開く。丸一日の休みは来年の6月までないらしい。

中尾教授が提唱する「特別ではない特別支援教育」の考え方のなかに、

多様化する学生にいかに対応すべきかのヒントがあるのではないかな。

それをを探るべく、話をうかがった。

中尾 繁樹 Shigeki Nakao

関西国際大学教育学部教育福祉学科教授。専門は特別支援教育。大阪教育大学教育学部を卒業し、神戸市の小学校教員を18年間、同教育委員会の指導主事を9年間務めた後、2008年から現職。発達障害や重度重複障害の子どもたちへの感覚運動遊びや心理臨床的アプローチ、ソフトサイン等の研究、実践活動を行っている。『特別支援教育の理論と実践』『特別ではない特別支援教育』など著書多数。日本LD学会特別支援教育士スーパーバイザーも務める。

何ができて
何に困っているのかという
背景の部分を見きわめること。
それができれば
支援する手立ては
いくらでもあります

私が専門としている特別支援教育と、従来の障害児教育はけっしてイコールではありません。障害児教育は障害がある子たちへの教育です。これに対し、特別支援教育の本質は、小・中学校の通常の学級に在籍す

る発達障害の子に限らず、すべての子どもたちの指導に活かせる教育です。

最近、「配慮が必要な子、気になる子が増えている」ということをよく耳にしますが、では逆に、配慮がいらない子はどんな子なのかと考えてみてください。そんな子はいませんよね。私が強調している「特別ではない特別支援教育」の基本は、教室の中をうろうろ歩き回る子、突然教室を飛び出す子に対してどう指導するかではなく、クラスのすべての子どもの実態を理解することです。子どもの実態がわかれば、そのような問題はなくなっていくます。障害の有無にかかわらず、すべての子どもたちのためにすべての教員が考えましょうという意味で、最近私は「みんなの特別支援教育」というふうにも表現しています。

大切なのは、障害があるかないかという視点で子どもを見るのではなく、その子自身が、どう見えているのか、どう聞こえているのか、なぜ喋れないのか、何ができて何

に困っているのかという背景の部分を見きわめることです。それができれば支援する手立てはいくらでもあります。

残念ながら、今の世の中、いじめも不登校も増える一方です。なぜかという、特別支援教育の理念や基本的な考え方が現場できちんと共有されておらず、依然として障害児教育のままだからです。

特別支援教育が普及・定着することは、子どもたちの学力向上や豊かな心の育成にもつながります。同じ学年のひとつのクラスの中でも、学力レベルの幅というものは広い。特別支援教育の観点で、一人ひとりの教育的ニーズを把握し、それに対応した指導を行うことができれば、学力が低い子を引き上げることはもちろん、上の子はさらに上へと、クラス全体の学力を向上させることができます。

つまり、特別支援教育は、予防的教育であり、先生方を育てる教育でもあるわけです。

のなかに、



いじめも、不登校も、
学級崩壊も、
未然に防ぐことが
できます

私はこれまで約4000の小学校、中学校、高等学校からの依頼を受けて、データに残っているだけで約35万人の子どもたちを見てきました。

具体的な指導方策を立てるためには、目の前にいる子どもが「なぜそのような行動をするのか」の背景を知り、それを踏まえた上での実践が必要になります。たとえば鉛筆がうまく持てない子に、持ち方だけを教えて

も改善はしません。なぜ鉛筆をうまく持てないのかという広い視点が必要で、そこには体のどの部分の発達に関係しているのかといったことへの理解も必要になってきます。

私に10分時間をもらえれば、クラス全員の子を観察して、「この子はこういうところが苦手だ」「この子が座ってられないのはこれが原因だ」と、一人ひとりがどんな発達の課題を抱えているかを見きわめることができます。姿勢、歩き方、目の動き、子どもが制作した作品など、私が子どもたちを見るポイントはたくさんあります。これらをトータルに判断して、担任にアドバイスをしています。あちこちの学校から指導に来てほしいと言われるのは、現場としてはこういう人間がいると便利だからでしょうね（笑）。

子どもがどんなことに困っているのかは、クラスに40人いれば40人とも違います。教員が困っているだけで、本人は全然困っていないこともあります。対応が必要なのは、大人の視点で見た困った子ではなく、本人が困っている子です。教育現場の深刻な問題のひとつに学級崩壊があげられますが、私にすれば、「あんたの指導力ないからやで」ということ。さまざまな学校を見てきましたが、教員に指導力があれば困ることはありません。

子どもをしっかり見て、子どもに寄り添った指導教育として、広い意味での特別支援教育を実践していけば、いじめも、不登校も、学級崩壊も、未然に防ぐことができます。何か事が起きて、それから手を打っても手遅れです。未然防止の考え方は、すべての段階の教育において大切なことです。万引きをしてからでは遅い、人を殺してからでは遅すぎるんです。未然防止ができなければ、日本はよくなりません。これは声を大にしたいことです。

大学で授業をしているでも学生の様子を見て好不調がわかりますから、しんどそうな学生を見つけたら、授業が終わった後に「ちょっと来い」と呼んで話を聞いています。勉強の悩みならいいのですが、彼女にふられたとか、晩飯を食べるお金がないとかいう話ばかり（笑）。でも、そういうことをしているの、学生の方から相談にくることも多い。

大学の授業でも、学級崩壊とまではいなくても、学生がしっかり耳を傾ける授業と、ざわざわしている授業があります。これもやはり教員の授業力の差ですね。大学の教員は本当に授業力が問われます。

人生の転機になったのは、
大学に入る前に
ヒッチハイクで
日本中を旅したこと

私はもともと体育の教員になりたいと思って教育学部に進学したんです。スポーツが好きで、学生時代は剣道やラグビーをしていました。

人生の転機になったのは、特にどこに行く、何をすると決めずに、大学に入る前にヒッチハイクで日本中を旅したことです。いろんな人に出会い、いろんな体験をしました。大勢の路上生活者が集まる大阪の西成区でボランティアをした時期もあります。そんな中で、もともと両親から「人を助ける仕事をしろ」と言われていたこともあり、自分には教育という分野の中でも、困っている子どもたちを支える仕事が似合っているのかなと考えようになりました。人にできないことをやりたいという気持ちもありましたね。

神戸市立小学校の教員をしていた頃は、重度重複障害の子の教育を専門にしていました。医療的なケアが欠かせない子、ホスピスで過ごす末期がんの子、いろんな子どもたちと接してきました。

教育の現場に立つ一方で、障害のある子に関わる仕事をする者として深く考えさせられる出来事もありました。1995（平成7）年に発生した阪神・淡路大震災では、教え子2人を亡くしました。1997（平成9）年に神戸市須磨区で起きた連続児童殺傷事件では、教育者として「子どもたちの犯罪を未然に防いでいかなければならない」という強い使命感を抱きかけられました。

こうした体験がモチベーションとなって、学校訪問に、現役の教員への指導に、講演活動にと東奔西走する今の私があるように思います。丸一日休める日は来年までない、などと言うと、まわりの人からは「忙しいですね」「大変ですね」と驚かれますが、私自

身は「何が大変なのかな」と思っていますし、疲れたとかしんどいというのは全然ないんですよ。

今の30歳以下の人は
二本足で立てない人が多い。
立っているようで
立っていない

今の子どもたちは姿勢が悪く、からだがシャキッとしない人が多いと言われています。それはからだの軸がぶれているから。だから授業中ちゃんと座っていられなくなり、ごそごそしてしまうのです。これは子どもたちにかぎらず、30歳以下の人たちの問題です。今の30歳以下の人は二本足で立てない人が多い。立っているようで立っていない、ふらついていているんです。

ここ数十年の間に、私たちの生活はどんどん便利になりました。人は、便利なものが増えてくると、使わない筋肉が増えていきます。たとえばベビーカーやバギーに、もう歩ける子まで乗っているのをよく見かけますが、あれは姿勢を悪くする最初の要因です。外で遊ぶ機会が減ったことも問題です。紫外線が悪者にされる時代ですが、人間は太陽光を浴びないと、脳の覚醒や心の安定を促すセロトニンというホルモンが分泌されません。部屋の中に閉じこもっていると衝動性やイライラ感が高まり、事故や犯罪に結びつくことになりかねません。

私は最近、こうした子どもたちの傾向を「不器用」という視点で捉え、どう関わっていくかということについて本学の大学院生と一緒に研究しています。

ここからここまでが不器用であるという定義はありません。脳の覚醒レベルが低いことも不器用になりますし、同学年の子と同じことが全くできないのも、自己表現の仕方や他者との交流がぎくしゃくするのも、不器用になります。自分で不器用だと思っ

たらそうなります。また最近では、しんどいときにどう動けばいいのかわからない、やらなければいけないときにやれない、喋らなければいけないときに喋れないというような不器用さを持つ子が増えています。いろんな意味の不器用がありますから、不器用の背景をしっかりと捉えることが重要です。その上で、感覚運動機能の観点から不器用さを改善するプログラムを提案する実践活動も行っています。

子どもたちへの指導も、
トップアスリートへの
指導も、全く同じです



アスリートに対する指導は、ご縁があって、フィギュアスケートの選手にジャンプの軸のとり方やタイミングについてアドバイスをしたのが最初です。その後、2018年に韓国で開かれる平昌オリンピックのチームアドバイザー（特別講師）として、全候補選手と指導者陣を対象に、本番に強い「こころほぐし」と、けがに強い「からだづくり」をテーマにした講演を行う機会をいただきました。

子どもたちへの指導もスポーツ選手への指導も、全く同じなんです。からだの仕組みは同じで、その使い方に上手、下手があるだけです。そういう意味では、私は0歳児からプロのスポーツ選手まで見ることができます。

アスリートは常に同じからだの使い方をしていますから、いったん自分の中で悩んで

まうと軌道修正しにくい。世界の頂点で活躍し、世界一上手なからだの使い方をするトップアスリートでもそうなんです。簡単なことなのですが、そこに外から全く違う視点を入れてあげると、こことからだの関係に気づくことができます。

簡単なアドバイスをしているだけですが、教員時代、肢体不自由児の運動・動作を指導していた経験がありますから、どのようにからだを使ったらいいのか、どうしたらからだの一部分を緩めることができるのかという点では、プロのスポーツトレーナー以上に細かい部分をわかっていると自負しています。

目でみる、
手でみる、
心でみる

本学の教育福祉学科の特色は、小学校、特別支援学校、幼稚園、保育園などで豊富な実務経験やマネジメント経験を積んだ先生方が多いということです。ですので、実際の教育現場ではこういうことに気がつけて、こんなリスクがあるよと、実践的に指導、アドバイスできるという強みがあります。うちの学生は、1年次から現場を体験させていることもあって、他大学の学生に比べると現場に強い。そして純粋で真面目なところ私は自慢に思っています。

来年度からは特別支援教育に関する科目が必修になります。幼稚園の先生を目指すにしろ、小学校の先生を目指すにしろ、子どもをしっかり見るためには、特別支援教育の視点が欠かせません。しっかり学んで、子どもの立場にたって子どもの実態を把握し、きちっとした授業ができる教育者になることを期待しています。

また私自身は肢体不自由児と向き合う際、「目でみる、手でみる、心でみる」ということを大切にしてきましたが、学生にもこの3つの力を身につけてほしいと思います。目でみる力は、子どもが何に困っているのかを知る知識の力、手でみる力は、相手のからだをさわってわかる実践的な力、心で

みる力は、相手に共感する力です。

学生には、「one for all, all for one」の精神を大切にしろともよく言っています。みんなのために一人でできることは自分が動け、誰か一人が困っていたらみんなで助けろということ。大学時代ラグビーが好きだった私が今もモットーとしているラグビー精神です。

目に見えない『困り感』を
持っている学生など、
従来の対症療法的な
アプローチでは
手遅れになる



本学では、障害があってもそれを学びの障壁とせず個性と能力を伸ばし、社会に巣立って活躍している卒業生もたくさんいます。

進行性の視覚障害のために目がほぼ見えない状態で入学してきたある学生は、大手住宅メーカーに就職し活躍しています。彼女が働きやすい設備を整えた上で、障害があるからといって特別な接し方はしない職場の上司の方の対応もすばらしいです。

他にも、耳が全く聞こえない中で4年間しっかり学び、聴覚支援学校の教員になった学生もいますし、車椅子でキャンパスライフを過ごした後、単身留学し、帰国後は市役所の職員として働いている学生もいます。大学に顔を見せにきてくれる卒業生も少なくありません。彼、彼女らがイキイキと働いているのを見ると、本当に嬉しいですね。

私たち教職員は、障害がある学生に対して学修上の配慮は当然していますし、のびのびと自由に学べる環境を提供する努力はしています。しかし、人と人のつきあいの中で

は障害の有無は意識していません。障害があるからといって日常生活で必要以上に手を貸すことはありませんし、特別扱いはしていませんですよ。

外から見てわかる障害を持つ学生だけでなく、人の話を聞いても聞きとれない、字がうまく書けない、人間関係がうまくいかない、特定の状況や場所への恐怖が病的に高い広場恐怖症、突然理由もなく動悸やめまいなどの発作を起こすパニック障害など、目に見えない「困り感」を持っている学生も学んでいます。学生から申し出があればいくらでも対処できるのですが、本人さえ気づいてないこともあります。授業についていけないから大学をやめる、という学生もいるでしょう。こうした学生に対して大学側は従来、授業が遅れてきたからこうしよう、大学に出て来なくなったからこうしよう、といった対症療法的なアプローチしかしてきませんでした。しかしそれでは手遅れです。ここに特別支援教育の考え方が導入できれば、授業を遅れさせない、学修を途中でやめさせないなどの予防ができるのです。

入学させた学生を
卒業させることは、
我々の責務です

本学の教育福祉学科では、全教員が、学生一人ひとりが何に困っているのかについて情報共有し、すべての授業で同じ配慮をしています。特別支援教育をはじめ、学習障害、社会福祉、精神医療、障害児教育など関連する分野の専門家も在籍しているので、困り感を持つ学生に対し、どのように授業を受けたいのか、どうやってノートをとったらいいいのか、レポートはどうやって書けばいいのかなど、実践的できめ細かいアドバイスをすることが可能です。もちろん、彼らを教える教員に対し、具体的な指導の仕方などの相談に乗ることもできます。大学生は人格や学習能力ができあがっている段階ですが、人と関わることができる学生ならば、教員が精度の高いわかる授業を

行うことで伸びていきます。今、関西国際大学のキャンパスで学んでいる学生たちは、私たちが入試を行って、4年間学ぶことができる、大丈夫だと判断して受け入れた学生たちです。入学させた学生を卒業させることは、我々の責務です。障害があろうがなかろうが、一人ひとりに自信を持って卒業してもらうことが大切だと考えています。

本来なら1年次の早い段階で、教員が学生一人ひとりを見て、大学生活に困り感を持つ学生のサインを見つけて援助ができればいいのですが、まだまだ学生を十把一絡げにして「大学生ならできるだろう」と考える風潮が根強いです。もちろんそこには「大学生だからできてほしい」という期待もあるのですが、教員の方々に対しては、学生の実態は一人ひとり異なるということを理解してもらえよう、働きかけていきたいと思っています。

また、大学全体で学生を支援していくための組織づくりも急務です。全国を見渡せば、たとえば専門の支援室を設置して全学的に発達障害学生支援を行っている大学もありますが、本学はまだ個人ベースの支援にとどまっています。その学生が抱えている困り感やそれに対する対処法について知っている先生は配慮するけれど、知らない先生は何もしないというようなムラをつくらず、大学全体で共通認識が持てる組織づくりが必要です。専門家が多く在籍する本学には、それができる力もチャンスも十分にあります。

関西国際大学は、「国際性」とともに「安全・安心」を全学的なコンセプトとして、これに基づく教育を全学展開しています。学内に特別支援教育を普及・定着させることは、まさしく多様な学生が安心して安全に通える大学であることの証になると思います。



学生の学びをサポートし続ける 累計26万部のロングセラー



1年次の必修科目である「学習技術」のテキストとして使用されている

『知へのステップ—大学生からのスタディ・スキルズ—』。

関西国際大学だけでなく、全国約290の大学で初年次教育・導入教育の教材として採用され、現在、第4版までの累計部数は26万部を超える。

本書は、本学人間科学部の上村和美教授が中心となって開発し、パイロット版を経て、2002年に発刊。以降、現在に至るまで大学生の必携書籍として支持を受け続けている。

上村教授に、『知へのステップ』誕生の経緯と、そこに込めた思いをお聞きした。



『知へのステップ—大学生からのスタディ・スキルズ—』
学習技術研究会・編著／くろしお出版
(奥・第4版 1,944円〈税込〉、手前から1、2、3版)

高

校3年生を大学1年生に
変える「スタディ・スキル」

私は関西国際大学が開学した1998（平成10）年に経営学部の専任講師に着任しました。当時は初年次教育や1年生のゼミを担当していたので、入学して間もない学生と面談する機会が多かった。そんななか「ノートが取れない」という学生がいて……。よくよく話を聞いていくと、彼らのいうノートテイクとは、黒板に書かれた文字をそのままノートに書き写すことなんです。高校までの授業とは違って、大学では一から十まで丁寧に板書する教員は、まずいません。ですから、90分の授業が終わってもノートは白いままになってしまう。ノートが取れないとはそういうことだったんです。

アメリカの大学では、新入生にスタディ・スキルと呼ばれる基本的な勉強の仕方を身につけるコースがありますが、日本の大学ではこうしたことをしてきませんでした。一方で、大学進学率が高まり、大学にはあらゆる面で多様な学生たちが入学してきます。そうした状況を考慮して、平成13（2001）年度の人間学部開設に合わせて、「学習技術」というスタディ・スキルの習得を目的とした科目を開講することになりました。

当時、「ライティング」「情報収集」など、テーマに関連する個別の教材はありましたが、「学習技術」の全15回の授業で伝える

上村 和美 Kazumi Uemura

プロフィール

人間科学部長。人間科学部人間心理学科教授。1994年、大阪大学大学院言語文化研究科博士課程修了、博士（言語文化学）。大阪大学大学院言語文化研究科言語情報科学講座助手などを経て、1998年より関西国際大学経営学部専任講師、助教授を経て2016年より現職。





「知へのステップ」
パイロット版

べき内容を一冊にまとめたものがない。「テキストがないなら自分たちでつくろう」という発想が、『知へのステップ』への第一歩となりました。

外部の教員を交えた 教材開発チームを発足

テキスト開発のタイムリミットは1年でした。当然ひとりではできませんから、本学の高等教育研究所（現在の教育総合研究所）のプロジェクトとして立ち上げ、チーム体制で教材開発を進めることになりました。私が協力を求めたのは、母校の大阪大学言語文化研究科の同窓生で、当時、関西地区の各大学で講師や助手として活躍していた若手教員たち。私の中では最初から、本学だけではなくて、広く一般的に使ってもらえる教材にしたいという思いが強くあったので、学外の教員にもメンバーに加わってもらったのです。

こうして、プロジェクトチーム「学習技術研究会」が発足し、学習技術という科目内容について議論するところから活動をスタートさせました。限られた時間の中で、徹夜して執筆することもありましたし、合宿して意見交換することもありました。当時はメンバーのほとんどが30代だったので、馬力がありましたね。

試行錯誤を繰り返し、苦勞してテキスト自体がほぼ完成した段になって、今度は「教育効果を高めるためには、教授法を示す指導案が必要ではないか」という声が研究会のメンバーから上がりました。そこで残り1ヵ月のラストスパートで、自分が執筆したそれぞれの章について指導用の資料を作成して、併せて授業を進める際の軸になるワークシートも準備しました。誰が授業を担当しても、重点の置き方が同じで、クラス差が生じない枠組みを用意したわけです。

こうして、開発から1年でパイロット版の『知へのステップ』が完成しました。

パイロット版を運用し、 学生の意見を反映させて 正式出版へ

「学習技術」の初年度の担当者は、経営・人間の両学部で10名、9クラスでの開講となりました。私自身は教材開発に携わった者として、全担当者とクラスをとりまとめるコーディネーター役を務めました。

パイロット版のテキストで1年間運用した後、アンケートや座談会を実施して、教材についての学生の意見を吸い上げました。これをもとに、研究会で検討を重ねて教材内容をブラッシュアップし、2002（平成14）年度に正式出版することになりました。

私にとってテキストの開発・出版はこれが初めてではなくて、本学開学時に「コミュニケーション技法」という科目で同様の取り組みをした経験がありました。その際、内部の教員だけで執筆し、学生の声を聞くことがないまま出版したために、中身が飽和状態になってしまったという反省がありました。「教員が教えたいこと」と「学生に教えるべきこと」は、必ずしもイコールではありません。『知へのステップ』では後者に重きを置いて内容のスリム化を心がけ、パイロット版を経て、学生目線で本当に必要なものを出版するという流れにしたわけです。

「学習技術」は、1年目は選択科目とし、2年目から必修科目になりました。学内の先生方から、「こんなことまで大学が学生に教えるのか」「学生が自分で学べばいいのではないか」といった否定的な意見も当初は聞かれました。教える側が疑問を感じていたから、それは授業を受ける学生にも伝わります。そこで重要になったのが、教員のモチベーションアップ。授業を担当する予定の先生方をプロジェクトに引き込んで、意見やアイデアをもらうことで参加意識を高めてもらう。特に「自分が言いたいことではなく、学生にとって必要なことを伝えていくことが大事」ということを強調し、理解してもらいました。

なによりも、教員の教える 姿勢が変わった

他大学から関西国際大学に赴任してきたばかりのある先生は、「この大学では、1年生でもレポートがレポートの体裁になっているから驚いた」と話してくれました。これは「学習技術」の授業のおかげです。

本学の学生は、大学に入学すれば学習技術というものを学ぶのが当たり前だと思われていますが、卒業後に他大学の出身者から「そんな授業があったんだ。それは良かったね」と言われて、実は当たり前でないことに気づくようです。学習技術で学ぶ内容は、社会人になってからも、たとえば何か報告書を書くときにも役立ちます。テキストの「大

学生からの…」という副題には、社会に巣立ってからここを書いてあることを活用してほしいという思いを込めています。

『知へのステップ』を導入する際、どうやって運用したかを教えてほしいという、他大学からの講演依頼も少なくありません。そこで強調するのは、教える教員のモチベーションが大事ということと、学内全体での運用をとりまとめるコーディネーター役が必要ということ。本学では今も、年度初めに担当教員が集まって情報共有する機会があり、初めて「学習技術」を教える教員には、授業の具体的な進め方をレクチャーします。こうしたことをやっていくと、実は学生より先に教員に変化が表れます。『知へのステップ』を導入した他大学からは「教員の教える姿勢が変わった」という声も寄せられています。

多様な意見を集めて普遍的な 内容のロングセラーに

『知へのステップ』は現在、全学での採用、ゼミ単位での採用を合わせ、全国280～290校で使用されています。初版以降、4回の改定を重ねていますが、内容そのものは変えず、掲載している Windows や Microsoft Officeの画面を最新バージョンに差し替えています。

本学の学生はひとり1台ノートパソコンを持っていますが、テキストにある画面と、実際に使っている自分のパソコンの画面が異なると混乱します。お金を払って買ってもらったテキストですから、学生に満足してもらえるよう、常に新しい情報にアップデートすべきだと考えています。

『知へのステップ』が多くの大学で採用されるロングセラー教材となったのは、内向きの視点で作成しなかった点が功を奏したのではないのでしょうか。さまざまな大学の教員が集まり、より良いものをつくろう、より普遍的内容にしようと志をともにできたからこそ、完成度が高い一冊を世に出すことができたのだと思います。

2018年4月に 関西国際大学は 創立20周年を迎えます。

創立記念式典は2018年9月に実施予定で、
20周年に向け本学の特色ある教育活動を一層展開すべく、次の事業を計画・推進中です。

主な記念事業（予定）

- 創設の地である尼崎地域におけるキャンパスの拡充・再編
- 三木キャンパスの計画的整備
- 学部学科等の改組・拡充と教育プログラムの改編
- 奨学事業の推進（留学生支援、GS／CSほか学生活動支援）
- 創立記念式典（2018年9月29日）及び連続記念講演会の開催（2017年秋から順次）
- 記念出版

安全・安心社会をリードする
関西国際大学



20周年記念 ロゴマーク

「海」「空」「地球」そして「安全・安心」を表す青色のラインが未来に向けて飛翔する姿を表わし、「夢」「希望」「情熱」を表わす赤色で未来を切り開く力を表現しています。

キャッチフレーズ

安全・安心社会をリードする関西国際大学

1950 1953

文部大臣の認可を得て、尼崎幼稚園教員養成所を愛の園幼稚園に開設

建学
愛の園幼稚園を創設



1955

1957 1976

1981

男性保育者の進出を受け入れるため、校名を関西保育専門学校に変更

専修学校制度発足に伴い、関西女学院保育専門学校の認可を受ける

尼崎幼稚園教員養成所を関西女学院と改称。文部大臣より幼稚園教員養成所の指定を受ける。関西女学院に保母養成所を開設。厚生大臣より保母養成機関の指定を受ける

幼稚園及び教員養成所を統括する
学校法人濱名学院を設立



1987

1989

関西女学院短期大学
（経営学科）を開学



学校法人濱名学院 関西国際大学ヒストリー

校祖濱名ミサヲ先生は、第2次世界大戦で自宅を全焼する。世相は混乱し、生活も苦しく物資にこと欠く中で、当時尼崎市連合婦人会会長、及び尼崎市教育審議会委員でもあった同人に私立幼稚園設立の強い要請もあり、かねてから抱いていた「戦後の復興は教育、特に幼児教育にあり」との信念から、資産を処分し、幼稚園建設にふみ切る。「以愛為園」即ち「愛をもって学園となす」の精神から人の心を受け入れる姿勢とおもいやりこそ人格形成の基礎を培う幼児教育の根本であり、建学の精神として最もふさわしいとの考えから「愛の園幼稚園」と命名し、自ら園長となり、陣頭に立って幼児教育に没頭する。



建学の精神 以愛為園

創始者 濱名 ミサヲ

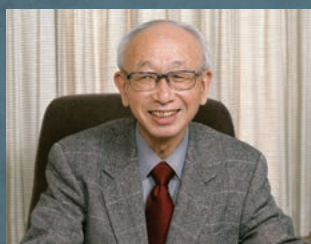
1907（明治40）年9月25日大阪府池田市に生まれる。1925（大正14）年3月、大阪・私立金襴会高等女学校補習科卒業。尼崎において連合婦人会長をはじめ数多くの役職に就いた後、1950（昭和25）年5月愛の園幼稚園を設立し園長に就任してからは、幼児教育にその生涯を捧げた。



関西国際大学歴代学長



初代学長 村上 敦
（1998年4月～2002年3月）



第2代学長 安平 昭二
（2002年4月～2003年3月）



第3代学長 北畠 霞
（2003年4月～2005年3月）



第4代学長 濱名 篤
（2005年4月～現在）



内山 勝人さん Shoto Uchiyama

出身学部学科 人間科学部人間心理学科
(2015年度卒業)

所属 高槻市立第九中学校



大学時代の成長体験が 教師としての原点です

人間心理学科から教職免許、教員採用試験にチャレンジして、見事に合格。

2015年から、高槻市立第九中学校の社会科教員として、3年生の担任として、
また野球部で活躍した経験を生かして野球部の顧問としても多忙な日々を送る内山勝人さん。

「とにかくがむしゃらに勉強した」という大学時代の経験のすべてを力に変えて
生徒に信頼される教員として、今後も日々、成長を続けている。

子どもたちが安心できる 居場所をつくりたい

社会科の授業をしていて、勉強が苦手な生徒から「わかった!」「面白かった!」と言われるのが一番嬉しいですね。社会は数学のように理解を積み上げていくタイプの科目ではないので「昨日やったところは全然わからなかったけど、今日やったところはめっちゃわかる」ということがあるんです。多くの生徒に社会の面白さに目覚めてほしいので、授業のたびに興味を持つきっかけを与えて、ひとつでも面白いことがあると感じてもらえるように工夫しています。

「あれもしよう、これもしよう」と欲張ってしまうので、授業の準備をしているとつい真夜中になってしまいます。

長期的には「安心感を与えられる教師」になりたいと思っています。昨年は2年生を担当し、現在は3年生の担任をしています。公立の学校にはいろいろな生徒がいて、学校に行きたくない、教室にいるのが辛い、と思っている生徒も少なくありません。そんな生徒たちが安心して過ごせる空間を作りたいのです。

そのためには対話が大事だと思うので、授業以外でも、給食時間、休み時間、廊下ですれ違った時など、あらゆるチャンスを捉えて一人ひとりの声を聞くようにしています。

野球から勉強へ 大学生活が大きく変化

こうした私の考え方の根底には、大学時代に、先生や職員さんがとても丁寧に話を聞いてくれた経験があると思います。

私が関西国際大学に入ったのは、硬式野球部の監督に声をかけていただいたのがきっかけです。野球部の一員として半年ほど野球漬けの生活でしたが、だんだん「せっかく大学に入ったのだから、将来のためにしっかり勉強しておきたい」と考えるようになりました。正直な思いを監督に伝えて野球部を退



部。勉強に真剣に取り組むようになりました。

といっても、最初から教師をめざしていたわけではありません。当時は、授業をたくさん受け、先生の話聞き、図書館に入り浸って本を読み、知識が増えていくのがただ楽しかったことを覚えています。そして1年生の終わりごろ、たまたま時間が空いていたので、軽い気持ちで教職課程取得のためのガイダンスを受けました。これをきっかけにして教職関連の授業を履修するようになったのです。

三木キャンパスで教職をめざす人は少なかったですし、勉強はハードでしたが、学修支援室にはずいぶん助けられました。教職関連の資料が揃っているし、わからないことがあればいつでも職員さんに質問できるし、勉強に疲れたら雑談もできるので、空き時間や放課後はずっと支援室で勉強していましたね。

多くの人が私の話に耳を傾け、相談に乗ってくれたことに本当に感謝しています。

大学でのすべての経験が 今の仕事に生きている

そして大学3年のとき、臨床心理学の先生の紹介で、中学校の特別支援教育のサポーターのボランティアに参加しました。教育の現場で子どもたちと実際に関わる喜びを知

った原点にこの活動があります。

同時に学内では学修支援チューターとして後輩に勉強を教えるようになりました。「レポートの書き方がわからない」「授業の内容がわからない」といった質問に、学修支援室の資料やテキストを使いながら教えるのです。人に教えることで自分も復習できるし、勉強の息抜きにもなる貴重な時間でした。

こうして教師になりたいという気持ちが次第に固まってからは「今がんばっておくことで将来が楽になる」と考えられるようになり、勉強が苦にならなくなりました。人間心理学科には教員志望の学生が少ないのですが、実際に教員になってみると、心理学を学んだことは大きなプラスになっています。授業でのカウンセリングの演習などで学んだメソッドは子どもたちと関わるさまざまな場面に応用できますし、心理学の基礎を知っているからこそ、色々な人間関係を理解できるからです。

また、私は学生時代にたくさんの授業に出席したおかげで、色々な先生の授業スタイルを知ることができました。この経験も自分の授業の引き出しになっています。たとえば、たまに授業を中断して学生にジャンケンをさせ、負けた学生にその日の授業内容や用語を説明させる先生がいました。中学校でもこれを試してみたところ、生徒たちの理解が進み

ました。特に授業で扱う内容が多い場合は、頭の整理のためにとても有効です。

がむしゃらに取り組めば 自分だけの未来が見つかる

大学時代の自分を振り返ってみると、特に目的も持たずに「勉強しよう」という思いだけで突き進んできたように思います。授業をたくさん受け、教職課程をこなし、その縁で中学校でのボランティア活動に参加し……。目の前の選択肢を否定せず、ただ順番にクリアしてきただけなのです。それでも毎日「今日は昨日より成長できた」という実感がありました。そして、そのおかげで自分の天職を見つけることができたと思います。

大学生生活は自由な時間が長い。それを全部バイトに使うか、将来のために勉強するか。選ぶのは自分です。関西国際大学には、学生の希望を実現するために動いてくれる先生や職員さんがたくさんいます。人と関われば関わるほど情報が集まってきてチャンスが増える大学です。やったことはすべて自分の財産になるので、ぜひアグレッシブに挑戦し続けてほしいと思います。



竹川 美甫さん Minami Takegawa

出身学部学科 教育学部教育福祉学科
こども学教育・保育コース
(2012年度卒業)

所属 積水ハウス株式会社
総合住宅研究所
ライフスタイル研究
開発グループ

やりたいことは全部やる！ 大学時代の経験が仕事の糧に

子どもからお年寄りまで、だれもが暮らしやすい快適な住環境づくりをめざして……。大手ハウスメーカーの研究機関で、研究員を支える技術事務として働く竹川美甫さん。持ち前のバイタリティと抜群の行動力、そしてきめ細かいコミュニケーション力。前向きに仕事に取り組むための基礎力を育んだ秘密は、視覚障害をものともせずチャレンジを重ねた4年間の大学生活にあるという。



「暮らし」をより豊かにする 研究活動をアシスト

総合住宅研究所のライフスタイル研究開発グループは、快適で自分らしい住まいづくりにつながる研究を行うセクションです。私はここで研究員をサポートする業務を担当しています。

研究テーマは、「子ども」「ペット」「食空間」などさまざまで、生活者の暮らしにあわせた住まいの研究を行っています。私は複数のプロジェクトに関わり、建築の専門知識を持つ研究員のアシスタントとしてフレキシブル

に動いています。業務の幅は広く、アンケートの集計やプレゼン用の資料作成などのデスクワークはもちろん、イベント運営やフィールドリサーチの補助などの現場作業も少なくありません。状況を的確に判断して動くのは難しいですが、研究成果が新商品に生かされたり、新しい暮らし提案につながったり、社会の役に立っていることが実感できるのでやりがいがあります。

たとえば、食に関するプロジェクトでは、流し台、作業台、コンロなどの配置が作業効率にどう影響するかを調べる実験に参加しました。レイアウトを細かく変えながら同じ料理をひたすら作り、動線がどう変わる

か、台がどう使われるかなどを細かく調べるのです。大変な作業ですが、この調査がベースになって食が真ん中の住まいづくり提案の新しいカタログができたときはとても嬉しかったです。

大阪・梅田に、研究所が運営する「住ムフムラボ」という体験型展示スペースがあり、ここで開催するワークショップなどの運営にも携わることもあります。子育て真っ盛りのお客様が多いので、ラボの一角でお客様の遊び相手をするこも。こんな時、保育士の資格があることをお客様に伝えると安心していただけ、大学時代に学んだ保育の知識も役立ちますね。



保育士という夢の先に 見つかった適職

実は私には先天性の視覚障害があります。0.01程度の視力はありますが、視野が狭い上に色覚異常もあり、メガネやコンタクトレンズでは矯正できません。大学に入学した時は保育士を志していたのですが、学べば学べど、私の視力では子どもの安全を確保できないということに気づき、次第に「子どもに関わる仕事全般に視野を広げよう」と考えるようになりました。

今の仕事でも不便を感じることはありますが、仕事に必要な資料の大半はタブレット端末で拡大できますし、デスクにも印刷物を大きく表示できる拡大読書器を導入してもらいました。職場の理解があることも大きいですが、毎日楽しく働くことができているのは、関西国際大学で学んだ経験のおかげだと思っています。

自らサポートを求め 充実した4年間に

私は盲学校から関西国際大学に進学しましたが、盲学校から大学に進学する人はとても少なく、私も複数の大学から「視覚障害者に対応できない」という理由で受験を断られます。

した。そんな中、受け入れてくれたのが関西国際大学だったのです。

とはいえ、前例がないので、必要なサポートを受けるためには自分で動かなくてはなりません。教科書や黒板の文字が小さく、非常に読み辛いので、板書を大きくわかりやすく書いてほしい、配布資料や試験用紙は拡大したものを用意してほしい、補助してくれる友人と一緒に最前列に座らせてほしい……。そんな要望を、入学直後から先生方をお願いして回りました。

やりたいことは何でもやろうと思っていたので、カンボジアでの3週間の海外サービラーニングに2回参加しました。学生メンターの活動も行い、後輩の指導にもあたり、チームをまとめる難しさを知りました。アルバイトもたくさんしました。レストラン、空港の売店、遊覧船スタッフ、キッズスイミングスクールのコーチなど、タイプの違う仕事をあれこれ経験したおかげで、苦手なこと、得意なこと、やりたいことが見えてきました。困った時は率直に伝えれば周囲の人がサポートしてくれることも学びました。さまざまな体験を通じて「生きる力」を伸ばした4年間だったと思います。

友人からはよく「楽観的」「ポジティブ」と言われますが、自分では、ただ「やってみたい」という気持ちが強いだけだと思っています。「人に嫌われたくない」「波風を立てたくない」と、自分を抑える人がすごく多いのですが、私は「みんなに好かれなくてもいい」と割り切って、言いたいことを言い、やりたいことをやってきました。その経験が大きな財産になっています。

関西国際大学は、熱意と目標さえあれば、どんなことにでもチャレンジできる大学です。その環境を最大限に生かすためには、できるだけ多くの先生とたくさん会話をする方がいいと思います。オフィスアワーを活用して、とにかく質問や相談を積極的にするので、私は勉強や就職のことはもちろん、恋愛のことまで相談しました(笑)。そのおかげで有益なアドバイスをたくさんいただきました。先生方は専門知識だけでなくネットワークも豊富なので、困った時に必ず力になってくれます。

卒業から5年以上経った今でも尼崎キャンパスを訪ねて、仲のいい先生や職員さんに近況を報告しています。仕事で恩師の協力を仰ぐこともあり、公私ともに交流が続いています。

社会に出る前の4年間は本当に貴重です。興味を持ったことは何でもチャレンジして、将来の糧にしてほしいと思います。

できるだけ多くの先生と 交流を持ってほしい

兵庫県と本学など

兵庫県内33大学が就職支援協定を締結

2017.02.21

兵庫県公館にて、本学を含む県内33大学が兵庫県と就職支援に関する協定を結びました。兵庫県から首都圏や大阪など大都市圏への若者の人口流出が増加している状況に対して、若者の兵庫県内での就職促進を促す事を狙いとしています。



【協定内容】

兵庫県と大学が次の事項について連携、協力して実施します。

- ①学生やその保護者等に対する兵庫県内の企業の情報、各種イベント等の周知
- ②学内で行う合同企業説明会への兵庫県内企業の参加
- ③学生及び卒業生の就職に係る情報の交換及び実績の把握
- ④県が実施する大学生インターンシップ事業の実施にあたり、受入企業の周知と学生の参加促進
- ⑤その他学生等の兵庫県内への就職の促進に関すること



兵庫県と

「地域安全まちづくり活動の推進に関する協定」を締結

今年度夏学期に実施した兵庫県三木市緑ヶ丘地区でのサービスラーニング「高齢者を守ろう『振り込め詐欺』防止対策」等、これまでの本学の教育や学生の地域における活動が、兵庫県の施策の「地域安全の強化」に沿うものであるとの評価をいただき、この度の締結となりました。防犯活動にかかる情報の共有、地域の安全安心の向上にかかる普及啓発活動への提案、研修会への参加や発表等、本学学生の成長につながる活動を展開していきます。

同日実施されたセミナーでは、人間心理学科犯罪心理学コース3年の大田舞さんによるサービスラーニング「高齢者を守ろう『振り込め詐欺』防止対策」の発表と人間科学部 西岡敏成教授による防犯講演「防犯ボランティアが育む地域の防犯力」が行われました。



平成28年度 地域安全まちづくりセミナー



公益財団法人

兵庫県障害者スポーツ協会と

「障害者スポーツ応援協定」を締結

公益財団法人兵庫県障害者スポーツ協会（会長兵庫県知事）との間で、「障害者スポーツ応援協定」を締結しました。第1回協定締結式には、ポートピアホテルにおいて、関西国際大学を含む16大学、企業23社、7団体が参加しました。



2017.02.27

第5回 ACP (Asian Cooperative Program) 会議開催

—— ウタラ・マレーシア大学



マレーシアのウタラ・マレーシア大学（以下UUM）で第5回ACP会議が開催されました。同大学のホテルに併設された会場で行われた会議にはホスト校のUUMのほか、同じくマレーシアのマネジメント&サイエンス大学、インドネシアのランブン大学、そして本学が参加しました。

午前中に行われた会議では、ACP会長校である本学の濱名篤学長が防災に関するサーティフィケート（履修証明）プログラムの先行事例として本学のプログラムを紹介し、各大学での実施方法などについて提案を行いました。サーティフィケートプログラムは、共同開発に関心がある大学がそれぞれの知識やノウハウを持ち寄って共

同カリキュラムを開発し、各国の歴史や風土、地形や気象条件などに基づいて生じる個別の「安全・安心」に関する課題やオフキャンパスプログラムを組み合わせ構成して実施しようとする試みです。その後、活発な意見交換が行われ、サーティフィケートプログラムの共同開発の進め方、プログラムを開発する分野、プログラムの修士課程への拡大など今後の方向性が話し合われました。

午後には、2週間にわたってUUMをベースに、2014年の大水害被災地であるクランタン州の被災地調査を含めて実施された「マレーシア北部の災害頻発地域の住民における防災意識」をテーマとした ACP オフキャンパスプログラムの成果発表が行われました。同プログラムには本学、UUM、ランブン大学それぞれから学生が計20名参加しました。参加者からは、多国籍のグループという環境での調査活動を通して、学生たちが実践力・コミュニケーション能力を高めたことを評価しました。



2014年11月に発足したACP (Asian Cooperative Program) コンソーシアムは2017年3月現在インドネシア、フィリピン、タイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマーの6カ国、協定校は14大学に発展し、アジアにおける「安全・安心」を中心にグローバルネットワークを展開しています。

入学予定者対象の「ウォーミングアップ学習」を実施

三木・尼崎の各キャンパスで3月4日（土）と17日（金）の2回、入学予定者と保護者を対象にした「ウォーミングアップ学習」（入学前教育）を開催しました。「ウォーミングアップ学習」は、新入生が一足早く大学生活を体験することで、大学生活に対する不安を軽減するとともに、大学で必要な学習技術を学ぶことを主な目的にしています。今年は合計で新入生425名・保護者119名の参加がありました。

当日は在生もスタッフとして多数参加し、学生目線での説明や案内を行いました。終了後のアンケートでは、これから始まる大学生活への期待が覗えるコメントが多数寄せられ、多くの方々に入学前の様々な不安を解消していただくことができました。



2017.03.04/17

ACP オフキャンパスプログラムが実施されました

3月6日（月）から13日（月）まで、本学においてACPオフキャンパスプログラム『災害への対策を通じて知る「安全・安心」な社会構築のためのフィールドワーク概要』を、ACP加盟大学の学生10名を招き実施しました。

二度目となる今回のプログラムには、インドネシア・ランブン大学から6名、マレーシア・マネジメント&サイエンス大学から4名、本学から8名の学生が参加しました。参加学生は、ともに英語による講義を受講し、国際協力機構（JICA）や兵庫県広域防災センター（三木市）等を訪問するなど、さまざまな角度から「安全・安心」について学び意見交換しました。

人と防災未来センター（神戸市）を訪問した参加学生は「阪神・淡路大震災に関する展示を見て衝撃を受けた」、また県広域防災センターを訪問した際には陸上競技場スタンド下の備蓄倉庫を見学し、「日本の防災体制を自国でも活かしたい」「災害時に人々を救う仕事に就くことを検討する」と話しました。



2017.03.06-13

2016年度学位記授与式を 挙行しました

2017.03.14



神戸国際会館こくさいホールにて、2016年度学位記授与式を挙行しました。本学を卒業して晴れて社会に巣立つ学部生は、教育学部195名、人間科学部173名、保健医療学部98名、また、大学院生は、人間行動学研究科5名、看護学研究科6名、計477名、全員がアカデミックガウンを身にまとい式に臨みました。

卒業生代表の教育学部 教育福祉学科 岸野なぎさんは、「関西国際大学での4年間を通して、仲間の大切さと、学び続けることの重要性を学びました。これまでの人生において最も大きな教員採用試験という試験を、仲間がいたからこそ乗り越えることができました。前向きになったり、落ち込んだり、周りを羨ましく感じたり、様々な葛藤がありました。そのようなとき、一緒に勉強したり、叱咤激励の言葉をかけてくれたり、進路は違えども共に励まし合い、支え合ったりした仲間の存在が必要不可欠でした。



新しい世界に飛び込んでいくことへの期待が大きい反面、不安もあります。そのようなときこそ、恩師や親友との出逢い、家族の愛情、大学での学びや経験を糧にして、どのようなときも成長につながると信じ、感謝の気持ちを忘れず、一歩ずつ、



自分らしく、前向きに歩いていきたいと思います。」と謝辞を述べました。卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。これからのご活躍を心より祈念いたします。

2016年度 保健師・助産師・看護師国家試験結果

2017.03.27

第103回保健師国家試験、第100回助産師国家試験及び第106回看護師国家試験の結果が発表され、本学保健医療学部看護学科の結果は以下の通りとなりました。

種別	受験者数	合格者数	合格率	全国平均
保健師	17	17	100%	94.5%
助産師	2	2	100%	93.2%
看護師	98	96	98%	94.3%

※数字は全て新卒者の数

ダルマプルサダ大学(インドネシア)が 三木キャンパスを訪問

2017.03.28

協定校であるダルマプルサダ大学より、Dadang Solihin 学長、Eko Cahyono 副学長等4名が表敬訪問のため三木キャンパスに来学されました。濱名篤学長との会談では両大学の交換留学の促進、インドネシア国内における短期研修プログラムの実施等、活発な意見交換が行われ、今後の学生交流等の充実について話し合われました。



2017年度入学式を挙行しました

2017.04.03



教育学部・人間科学部・保健医療学部525名、大学院16名、編入学5名、台湾、中国、フィリピンからの交換留学生3名を含む549名の新入生を迎えて、2017年度の入学式を、神戸国際会館こくさいホール(神戸市中央区)にて挙行しました。式典では、開式の辞に続き、濱名篤学長の入学許可宣言が行われ、学科長の呼名で新入生が一人ひとり壇上に上がり、濱名学長と握手を交わしました。続く学長式辞で、新入生に向けての励ましの言葉が贈られました。

学長式辞の後、在学生代表として、学生会会長の教育学部教育福祉学科4年生の土井俊輝さんからの歓迎の言葉を受けました。続いて、新入生代表として、教育学部英語コミュニケーション学科の干場百華さん、安井桃花さんは、「私たち二人はオナーズプログラムの1期生として関西国際大学に入学しました。2020年に開催される東京オリンピックによって、ますます日本の国際化が進むことでしょう。それと同時に私たち日本人は、より高い英語コミュニケーション能力が求められます。そこでオナーズプログラムの特色である、1年間の交換留学を活用して、他国の言語や文化の理解を深め、東京オリンピックではもちろん、将来は世界を舞台に活躍できる人材になりたいと決意を新たにしました。教職員の皆様、諸先輩方、私たちは、未熟ではありますが、何卒、厳しく、そして温かくご指導くださいますようお願いいたします。」と力強く決意を語りました。



神戸ウォーカー開催

フレッシュマンウィークの一環として、濱名篤学長自らが神戸の街を案内する「神戸ウォーカー」を開催しました。当日は、新入生27名、メンター4名と教職員6名の総勢37名が参加しました。一行はJR灘駅に集合し、「人と防災未来センター」「風見鶏の館」「神戸ムスリムモスク」「南京町神戸中華街」までの道のりを散策しました。

「人と防災未来センター」では、阪神・淡路大震災の地震破壊のすさまじさを映像と音響により体感し、また、復興に至るまでのまちと人を、直面する課題とともにドラマで紹介するビデオを鑑賞しました。実験コーナーでは、液状化実験や免震構造・耐震実験を見学し、実践的な知識を学びました。「神戸ムスリムモスク」では、関係者のご協力により寺院内を拝見させていただき、貴重なお話を伺うことができ、新入生の心に深く刻まれたことだと思います。



濱名篤学長による名所ガイドとクイズもあり、留学生を含む学生たちは、神戸の街について知識を深めることができました。このイベントを通して、両キャンパスの学生の絆が深まり、また、学生、学長、教職員の交流の場となりました。

『大学ランキング2018』(朝日新聞出版) 「注目する学長」に濱名篤学長が6位にランクイン!

2017.04.20

日本の767大学を評価した、『大学ランキング2018』(朝日新聞出版)が発行され、各大学の学長が評価する「注目する学長ランキング」で、本学の濱名篤学長が昨年度に引き続き、全国6位にランクされました。また、「教育面で注目」される大学として、全国12位(関西では、近畿大学、立命館大学に続き3位)にランクされました。

長年に渡り教育改革の先頭を歩み続けてきた成果を各大学の学長からも評価され、この度の大学ランキング上位ランクインにつながったものだと考えられます。

吉川地域活性化新拠点活動の一環として学生報告会を開催

(兵庫県「大学等との連携による地域創生拠点活動支援事業」)

2017.05.20

今年3月に三木市吉川町に開設した『よかわオープンイノベーションラボ』の活動の一環として、ステークホルダーを招き、「山田錦まつり」の課題や解決策を発表する学生報告会を、JAみのり吉川営農経済センターで開催しました。



学生報告会では、「山田錦まつり」に参加した経営学科の学生8名が、JAみのりや吉川まちづくり公社、吉川商工会の関係者を前に、「子どもたちが楽しめる内容が少ない」「人が多い場所でしている餅つきは行列もでき危険」など、自分たちが感じたイベントの課題を報告しました。そして、解決策として、「ボールプールの設置やビンゴ大会等お酒が飲めない人も楽しめるイベントの開催」「餅つきなど行列のできる店舗は会場端へ変更し、会場の混雑を緩和させてスペースを有効活用する」などを提案しました。

関係者からは、「自分達では気がつかなかった新しい目線からの提案とても参考になった。今後活かしていきたい」などの評価をいただきました。



『よかわオープンイノベーションラボ』では、関西国際大学(三木キャンパス・尼崎キャンパス)の学生が、ラボを地域活動拠点として、サービスマーケティングやインターンシップなどの正規授業を含め、持続可能な農村地域に結びつく地域活性化活動を実践しています。

保健医療学部看護学科 1期生のホームカミングデー開催

2017.07.01



三木キャンパスにおいて、保健医療学部看護学科1期生のホームカミングデーを開催し、卒業生19名と教員16名が参加しました。高見沢学部長による歓迎の挨拶からはじまり、卒業生の近況報告や写真撮影など互いに久しぶりの再会を喜びました。

卒業生たちは、就職してから今日までを振り返り、「自分ができることが増えた」「患者さんに『ありがとう』と言ってもらえた」「自分が看護師であることを実感した」など現場での体験から嬉しさややりがいを感じている様子でした。その反面、仕事と一人暮らしの両立の難しさや、現場での知識、技術、経験の不足を実感することも多く、勉強の毎日であるとの報告もあり、同じ時期に同じ悩みや不安をもつ卒業生たちにとっては、仲間の報告が励みになり、明日からまた頑張ろうという気持ちになったとの感想がありました。今回参加の卒業生からは、仲間と不安や悩みを共有でき、先生方の話も聞けて良かった、またこのような機会があればぜひ参加したい、などの声が寄せられました。



派遣交換留学修了式・ 2017年度秋派遣交換留学決定 通知書授与式を挙りました

2017.07.12/24



派遣交換留学から帰国した学生による留学報告会、および2017年度秋派遣交換留学決定通知書授与式を、三木キャンパスでは7月12日（水）、尼崎キャンパスでは7月24日（月）に執り行い、計15名の学生が出席しました。

第1部の派遣決定通知書授与式では、計8名の学生が留学に対しての期待や感謝、目標などを述べ、濱名学長から派遣決定通知書を受け取りました。続く第2部の交換留学修了式では、このたび帰国した計7名の学生が留学を通して得られた気づきや成果について報告をし、修了証書を受け取りました。異なる言語や宗教、価値観を持つ土地で生活するという事は、必ずしも楽しい事ばかりではありませんが、苦しみ悩んだ経験があったからこそ、その国や地域、また自己をより深く見直す機会が与えられ、学生たちには確かな自信が感じられました。

派遣決定通知書を受け取り、これから留学に飛び立つ学生たちにとっても、先輩の体験談を聞き、感想を述べ合う等の交流が持てたことは、大変意義深い時間となりました。



兵庫県地域創生拠点支援事業

2017.07.23

よかわオープンイノベーションラボ開設記念 シンポジウムを開催

三木市吉川町に新拠点「よかわオープンイノベーションラボ」を開設し、地域創生活動の開始を記念したシンポジウム『いま、大学との連携で地域が面白い』を、JAみのり吉川営農経済センターにて開催しました。来賓として、北播磨県民局副局長西川嘉彦様、三木市市長 仲田一彦様、JAみのり代表理事専務中嶋直裕様にご出席いただき、ご挨拶を賜りました。

シンポジウムの第一部では、神戸大学 大学院農学研究科の山口創先生と片山寛則先生による『大学との連携による特産品の開発と6次産業化』をテーマとした特別講演、第二部では、吉川町の生産関係者と専門家による意見交換『つなぎ 活かす よかわの可能性』を行いました。

特別講演では、神戸大学の農場で新品種のジャガイモを開発し、地元農家や行政と協力して普及に取り組んでいる事例や、野生ナシの遺伝資源を用いた特産品開発について紹介されました。続いての意見交換では、農家の担い手の高齢化や後継者不足、山田錦以外にも強味となる農産物の必要性、地域ブランドの発信力強化などの意見が出されました。

この度のシンポジウムをキックオフとし、「よかわオープンイノベーションラボ」を中心に大学と地域が一体となり、地域創生、地域再生の取り組みを持続的に展開していきます。



人間科学部経営学科ホテル・ブライダルコースの学生による 「キャンパスウェディング」を実施

2017.08.06



今年で6回目となるホテル・ブライダルコースの学生によるキャンパスウェディングが、尼崎キャンパス1階エントランスで行われました。

カップル募集のチラシ作成から学生全員で取り組み、告知、選考、企画、実行まで、すべて学生主体で行われました。今回選ば

れたカップルの花嫁のヘアセットは、美容師である新郎のご両親が担当されるというサプライズもあり、学生たちのヘアセットまでご厚意によりしてくださいました。

気を引き締めて臨んだ結婚式は、日々の準備と練習の成果発表の場となり、サプライズのフラッシュモブでは、会場で笑顔と涙にあふれ、感動のウェディングとなりました。

それぞれのチームが手づくりで準備し、「誰かのために」という想いをカタチにした学生たちは、たくさんの皆様のご協力に感謝し、次への意気込み新たにしました。



フィリピンの家庭料理「アドボ」

【材料】5人分

鶏むね肉……………4～5枚
 醤油……………1/2カップ
 酢……………1/2カップ
 玉ねぎ……………1個
 にんにく……………4個
 黒コショウ……………大さじ1
 ローリエ……………3枚
 砂糖……………お好みで

【作り方】

1. 鶏むね肉を一口サイズに乱切りする。
2. にんにくは皮をむき荒みじん、玉ねぎは薄切りにする。
3. 大きな鍋に、醤油、酢、にんにく、黒コショウ、ローリエをすべて入れて混ぜる。
4. 3の鍋のなかに鶏むね肉を加えて、蓋をして冷蔵庫で寝かす(30分～3時間くらいお好みで漬け込む)。
5. 4を強火にかけ、4～7分混ぜながら煮る。
6. 鶏むね肉が柔らかくなるまで、時々混ぜながら蓋をして25～30分くらい弱火～中火程度で煮る。
7. 酸っぱくなりすぎたら、砂糖を少しずつ入れる。



DELICIOUS!



ソースの色は黒茶色になる!



みんなで
作ってみました♪
LET'S COOK!



みんなで作ることが
とても楽しかったです。
日本の調味料はフィリピンの味とは
違っていました。
少し酸っぱい味になったかな。
サフル ベアタ マリ パウリノさん
教育学部英語教育学科 交換留学生
(フィリピン大学ディリマン校出身)



お好みでシーフードミックスや
ゆで卵を入れてもOK



とても懐かしい気持ちになりました。
今回は 89 点ぐらいの出来でした。
みんなで作ることで、
とても美味しいアドボが出来ました
フエンテス シャーン エクセーヴィアさん
教育学部英語コミュニケーション学科
交換留学生
(フィリピン大学ディリマン校出身)



ご飯と一緒に食べるとおいしいよ!

色々な国の留学生と触れ合いながら、
日本の味と違った料理を作ること、
それぞれの文化を紹介し、
お互い理解することができました。
とても美味しかったです。
和田 梅花さん
教育学部英語教育学科 4年



お便り待っています

「関西国際大学広報誌 クイス」へのお便りをお待ちしています。

〈あて先〉 関西国際大学 企画部 企画・広報課

〒673-0521 兵庫県三木市志染町青山1丁目18番

電話:0794-85-2288(代) FAX:0794-85-1102(代) E-mail:kouhou@kuins.ac.jp

KANSAI UNIVERSITY OF
INTERNATIONAL STUDIES
PR MAGAZINE **kuis** vol.74 2017.09

「関西国際大学広報誌 クイス」 74号 2017年9月発行
 制作: 企画部 企画・広報課

KUIS 関西国際大学
 Kansai University of International Studies

三木キャンパス 〒673-0521 兵庫県三木市志染町青山1丁目18番 TEL 0794-85-2288(代)
 尼崎キャンパス 〒661-0976 兵庫県尼崎市潮江1丁目3番23号 TEL 06-6498-4755(代)

「関西国際大学通信」は「関西国際大学広報誌 クイス」へ名称変更しました。

